カンチェンジュンガの白い風

ヤルン氷河からミルギン・ラ越え
カンチェンジュンガBC（パンペマ）へ35日間の記録

2004年10月17日（日）～11月20日（土）

文と写真　：　綾部一好
記　　録　：　浅賀正晴

ジヤヌー（７７１０ｍ）

カンチェンジュンガ（８５８６ｍ）

＊　はじめに　＊

貴重な仲間達の力添えもあって、35 泊の長期にわたる
ヒマラヤ山脈のトレッキングが無事、今終わった。
十代の後半から始まった私の登山歴史の中で、まちがいなくサミットの存在になるはずの
今回の 「ヤルン氷河からミルギン・ラ越え、カンチェンジュンガＢ・Ｃ（ベースキャンプ）へ３５日間」
のトレッキング　Trekking。

今まで紀行文など、一度も書いたことなどは無いが、今回だけは例外で
少しぐらいは苦労してでも、思いきって書き記してみたいと思う。
感動や思いが大きすぎて、そのまましまっておくことができないものが
毎日、一つや二つは、必ずあったからである。
はじめて体験する、その貴重なものも、時の流れの中で
すこしずつは消え失せていくとは思うけれども
文字に結晶させるめんどうな作業で、その分だけ少しは長く
その輝きを保てるかもしれない。

かなりの日数がかかりそうだが、その時々にメモしておいたものを
ていねいに整理して書いてみようと思う。
すでにつかみ得たネパールの地名は、忘れないためにも
できる限りそのまま横文字で生かしていきたいと思う。

第一日　平成16年（2004年）　10月17日（日）
成田空港　Narita　Airport　＝　バンコク　Bangkok

すてきな、すてきなドラマが始まるような気がする

ついに成田空港を飛び立った。そこにいる誰か(Somebody)が、私にとって、貴重な誰かになりそうな、そこにある何か（Something）が私にとって貴重な何かになりそうな、そんな気がする。

第二日　10月18日（月）
バンコク　BangkoK　　カトマンドゥ Kathmandu　（入域許可手続き、トレッキング打ち合わせ）

ヒマラヤ山脈はでっかい

中学生の頃も見た。高校生になってもよく見た。そして、大学時代、破れそうになるまで眺めた。地図のヒマラヤ山脈。今回の、二回目のヒマラヤ山脈トレッキングで、また少し学習を深めた。

少しずつだが、ヒマラヤ山脈が見えてきた。日本の、北アルプスや南アルプスとは、けた違いの、大きな大きな山脈だと思ってはいたが、その大きな大きなの描き方が、まったく違っていた。ヒマラヤ山脈はおよそ、南北は200Km～300Kmだが、東西は2400Kmにも及ぶ。
東はブラマプトラ川　Brahmaputra　Rの大屈曲点から、西はインダス川　Indus　R　まで、長く長く連なっている。

このヒマラヤ山脈の中核をなすのがネパール・ヒマラヤで、世界の8000m 峰14座のうち8座が、このネパール・ヒマラヤにある。あまりにも大きすぎるので、この山群は、普通9～10に分割しながら書いたり話したりしている。

東の方から西へ、カンチェンジュンガ山群Kangchenjunga　　Region、マカルー山群　Makalu　Region、クーンブ・ヒマール　Khumbu　Himal、ロールワリン・ヒマール　Rolwaling　Himal、ジュガール・ヒマールJugal　Himal、ランタン・ヒマール Langtang　　Himal、ガネッシュ・ヒマール Ganesh　Himal、マナスル山群 Manaslu　Region、アンナプルナ・ヒマール Annapurna　Himal、ダウラギリ・ヒマール Dhaulagiri　Himalと続いている。

今回の、ヒマラヤ山脈トレッキングは、この一番東にある　Kangchenjunga　Regionである。

DB　さん（ディアン・バハドール・ライ）に惚れてしまいそうだ

Kathmanduに入国して、一番はじめに会ったのが、今回のトレッキングのサーダー（Sirdar）である DBさん。
空港では、二言、三言しか話してはいないし、ともにした夕食時も、たいした話はしていない。
それなのに、その時にそして別れたあとに私の心に灯った、あの不思議な感じは何だったのだろう。

うまく言葉では言えないが、この歳まで生きてきた中で、このような感じの人には、まったく会ったことがないような、そんな人に思えた。35　泊も、朝から夜までのテント生活をともにしていたら、この私はきっとこの DBさんが大好きになってしまうだろう。

第三日　10月19日　（火）
カトマンドゥ　Kathmandu　（トレッキング許可証取得）

ヒマラヤにまでふくらんだ夢

私の夢のふくらみは、少年期にまでさかのぼる。どんどんふくらむ一方の私の夢はいくつかの好条件が重なり合っていたからだと、今つくづくそう思う。
ひとつめのそれは、地理的環境。100メートルあるかないかの小さな山の西側がすぐ海で、東側の山のふもとに家があり、畑や草原や川などがそこから広がっていく、そんな村の中で私は少年期と青年期を送っている。遊び道具の少なかった時代背景も、もしかしたら幸いしているかもしれない。

大自然は、一つ工夫すれば一つ、二つ工夫すれば二つ、いくらでもその中から遊びを引き出すことができた。ふたつめのそれは、人的環境。父母を含めて、家族みんなが動物好きで、飼っていた動物が一番多い時は、アンゴラ兎約100匹、白のニワトリ約30羽、チャボ約10羽、豚3匹、犬、猫、鯉と、農家でもないのに飼える動物はなんでも可愛がって飼っていた。

毎日毎日の生活が生き物を含めた、この大自然との関わりの中にあったことがヒマラヤにまで、夢がふくらんでいった大きな理由だと思う。

第四日　10月20日　（水）
カトマンドゥ・Kathmandu　=　ビラトナガール飛行場・Biratnagar　Airfield　=　タプレジュン飛行場・Taplejung　Airfield（1300）　=　デオラリ・Deorali（1425）　=　ラリー・カルカ・Lali　Khrka（1615）

エンジンの回転数を手動で上げている

左側の操縦士が、右側にいる操縦士と何やら話しながら、空港の一番隅の、コンクリートになってはいるが、まるで野原のような感じの滑走路を U ターンさせて、その小さな飛行機を空港の真ん中に動かしてきた。

真ん中に来ても、右も左も草原だけで飛行場の感じはまったくしない。いよいよ飛び立つのか、エンジンの音がどんどん大きくなっていく。その振動がじかに伝わってくる。　飛び上がった。
エンジンの回転数を教えてくれそうなその振動はそのまま続いている。予定では直接タプレジュンTaplejungに飛ぶはずだったが、急きょビラトナガール Biratngarを経由することになったらしい。
これは私にとって、もしかしたらラッキーなことかもしれない。

Biratngarからaplejungに飛ぶ飛行機は、これよりもう一回り小さいはずである。
ゴトンとすさまじい音をさせて陸に着いた。安全ベルトをつけ忘れていたのを、この着陸時の音のすごさでとっさに気がついた。

ついに新しき詩歌(しいか)の時は来（きた）りぬ

ついに　新しき詩歌（しいか）の時は来りぬそは美しき曙のごとくなりき・・・で始まる島崎藤村の、あの新体詩に向かった時の心境と、今の私の心境とが、まったく同じような気がする。
ついにその時が来る。胸の騒ぎが時の進みにつれ、どんどんふくれ上がってくる。
今ここに何を書いても、この騒ぎを静めることはできない。

ついに来た。ついにその時が来た。小さな小さな飛行機が目の前に飛び降りてきた。
Yeti Airlines 9N AFE。 18人乗りだと、DBさんが教えてくれる。

着陸して離陸するまで、なんと5分

野原の滑走路に面した三方がガラスだけの、天井も低く、奥行きがわずか20m～30m位しかない、狭くてシンプルな空間が、Taplejungに飛ぶ飛行機の待合室である。ガラスの向こう5m先に、私達三人の荷物がワゴンに積まれて置いてある。

そのワゴンから5mと離れていない所に、急に飛行機が着陸してきた。あまりにも近すぎてびっくりしてしまった。飛行機が完全に止まる。乗客が降りて来る。荷物を運び入れる。私達が乗る。タラップをしまい込む。飛び立つ。この間わずか5分。またまたびっくりしてしまった。

操縦士がカメラを受け取って・・・

15分もしないうちに、真っ白い雲の中に入った。そして、すぐに雲が切れた。家や畑はもうどこにも無く、大きな山と大きな川だけの中に来ていた。
乗客は7～8人のイギリスのメンバーと私達だけである。操縦室のドアが開いているので前方の山も見ることができる。大きな山の稜線をいくつもいくつも飛び越えているうちに、また厚い雲の中に入った。

突然、前の方に座っているイギリスの人達の声が大きくなった。運転席の前方に、ジャヌー（Jannu7710m） が見えている。一番前の一人が身を乗り出してカメラを向けた。左に座っている副操縦士ではなく、右側の操縦士が、後ろを振り向いて両手でそのカメラを受け取った。そしてかなり丁寧にJannuを撮った。もう一人の人がカメラを差し出した。笑顔で受け取り、同じように丁寧に、またJannuを撮った。

私達三人のポーター（Porter）が、なんと全部で23人

Taplejung Airfieldで、私達を待っていたスタッフと合流する。すぐに気がついたが私達を助けてくれる人達の数の多さである。夕食の時、DBさんから話を聞いて、あらためてびっくりした。
四日前にグンサ(Ghunsa3795m） に向けて、9人のPorterがKathmanduを出発している。そして今日二十日に来られた人は6人だけだが、明日登って来るPorterが 8 人いる。

年間で最大の秋祭りであるダサインDasainのお祭りが、ちょうど今日から二十八日まであるためである。合わせて23人が私達三人のためのPorter 達である。今回の山がかなり高いので、グンサGhunsaまでの Porterと Ghunsaから上の、高所 Porterとを分けて頼んだとのこと。
これは、SirdarであるDBさんの今回のトレッキングに対する考え方と、DBさんの持っている力量からきている。

第五日 10月21日 （木）
ラリー・カルカ・Lali Kharka（夏の間使われる、家畜の放牧地のことを カルカ という。石垣の囲いや、番小屋があることが多い）（0730） ＝ パワ・コーラ・Phawa Khola（1030-1200） ＝ クンジャリ・Kumjari ＝ カーレ・バンジャン Khare Bhanjyang（2170m、このような低い峠のことを Bhanjyangという）（1530）

Lali Kharka の朝 Good Timing

今回のトレッキングの、初めてのテント。 Morning Callの予定は 5 時30分。20分前に目が覚める。耳が悪いので、テントの外からの呼び声は、多分聞こえない。そう思って、5時25分にテントを開けて待つ。薄暗い中にも、はっきりと、いくつかの山の頂きが連なって見える。

山の名前はどれにもついていないが、高さはどれも6000mは越えている。30分ちょうどに、Good Morningの声がした。そして、ちょうどその時、コケコッコーと、一番鳥の朝を告げる鳴き声がした。何か、とても良いことがありそうな、さわやかな朝を迎えた。

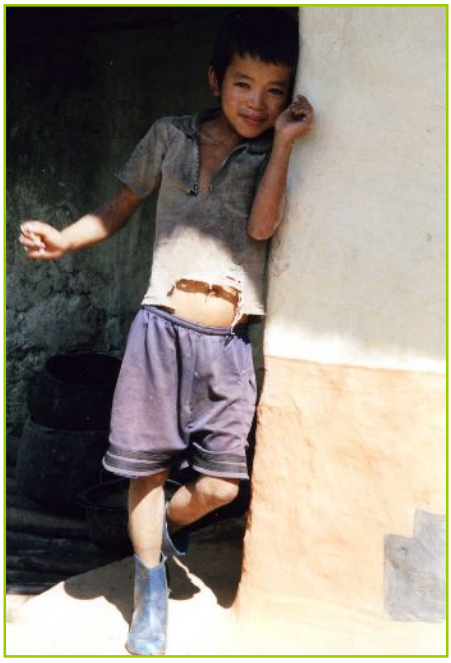
もう会えたかな

今日で、アンナプルナ Annapurna I 峰での、日本登山隊二人の遭難死から11日目になる。もう遺体は見つかって運び下ろされたのだろうか。 Kathmanduに着いた日の翌日19日に、今回のトレッキングで世話をしてもらっているコスモトレック社の社長さんに会いに行った。

社長の話だと、遺体がそのままそこにあるか、あるいは流されているか、まだ確認がとれていないが、明日にはヘリが飛ぶことになるかもしれないとのこと。亡くなった二人の遺族の方々や友人達が、たまたま私達と同じホテルに宿泊していたこともあって、どうなっているか気になって仕方がない。

はじめて見るカンチェンジュンガ Kangchenjunga

カーレ・バンジャンKhare Bhanjyangにトレッキング2回目のテントを張る。ここは峠でもあるので、テント場のここからカブルーKabru(7338m)とKangchenjunga(8586m)が遠くに小さく見える。KangchenjungaはMt Everest, K2(Godwin Austen)に次いで、世界で三番目に高い山である。あと17日登って、17回テントを張ったら、あのKangchenjungaの氷河を登り、KangchenjungaのベースキャンプがあるパンペマPangpemaにテントを張り、そこからさらに登って、Kangchenjungaの真ただ中に入っている。 Kangchenjungaはみごとな山であるに違いない。



おどろき・・・これが今日の夕食 Menu

マッシュルームスープ、ポップコーン、生卵、すき焼き、チャーハン、いんげんの胡麻あえ、オクラ、つけもの、パイナップルのデザート。
参考までに、昨日の夕食は、野菜スープ、パパルー、カレーライス、てんぷら、とんかつ、サラダ 野菜炒め、果物、Cook長のアントレさんは、ただものではない

「高地に住み、高地で生活している子ども達をしっかり見てくる」今回のトレッキングでの、私の個人的な努力目標のひとつである。全部で写真も１２５枚撮らせてもらった。

これはその中の一枚である。いっきに山を下りてきて、パワ・コーラ(Phawa Khola)につく。

こんどは、ここからカーレ・バンジャン(Khare Bhanjyang)に向けて一気に坂を登る。その途中のクンジャリ(Kumjari)という村で、ひと休みする。その時、写した少年である。(10/21)

第六日　10月22日　（金）
カーレ・バンジャン・Khare　Bhanjyang（0715）　＝　アンパン・Anpang（1120-1230）　＝　ポンペダーラ・Ponpedhara　＝　ママンケ・Mamankhe（1640）

ヒマラアヤの蝉　ジャオクリ　Jyaukuri

Khare　Bhanjyangからの下りはかなり長い。7時10分にスタートして、すぐ下りはじめた。
こんな早い時間に、まさかと思ったが、右側の斜面の下から蝉の鳴き声がする。
左側も同じような樹木が茂っているのに、そちらからは聞こえてこない。

1時間下って5分の休憩を二回程繰り返したが、その蝉の鳴き声はずっと続いている。そこからさらに1時間下った。蝉の声はまだ続いている。 Sirdarに聞いたらJyaukuriだという。じつにきれいな鳴き声である。ジージー蝉の鳴き声に少し似ているが、声がもっともっと澄んでいる。スズムシの鳴き声にも似ているが、あれほど澄んではいない。
ジージー蝉とスズムシが、力いっぱい、声を合わせて鳴いたら、このJyaukuriの鳴き声になるかもしれない。

Today‘s　our　チャド・パールバ（お祭り）

Nepalには、大きなお祭りが二つある。最大のお祭りは秋祭りのダサインDasainである。
私達のトレッキングは、じつに　幸運な時にある。 Dasainは、Kathmanduを出発した二十日に始まり二十八日まで八日間ある。 SirdarがKitchen　HelperやPorter達と、どこかで相談していたらしく、今日、このMamankheで私達のお祭りをすることになった。ヤギの変わりの豚と、ニワトリ二羽の生命を頂くことにした。

高地のこのあたりからよく飲まれるトンバTongbaというお酒がある。もちろんKathmanduあたりでは飲めない。 Sherpa族やRai族Limbu族それに、Tamang　族は、好んでこのTonbaをヒエから作って飲む。癖になりそうな独特の味をしている。私は今日のこのお祭りを、独り言のように、MamankheのTongba，Mamankheのニワトリ、Mamankhe　のブタ・・・と呼んでいる。 Mamankheは忘れることのない村の一つになるようだ。

第七日　10月23日　（土）
ママンケ・Mamankhe（0725）　＝　ヤンプーディン・Yamphudin（1220）

ヤッホー、何回も何回もヤッホー

Mamankheの早朝、準備が整ってさあ出発しようと歩き始めた。その時、上の方から人の呼ぶ大きな声がした。たしかに山の上の方で男の人が村のあちこちに向かって、ヤッホーに似た大きな声をだれかに向かって出している。それも、5回や10回ではない。近くにいる村の人に聞いてみたら、たった今、人が死んでそのことを離れて点在している村人達に知らせているのだという。

きっとこの後、通夜のような死者との最後の別れをするのだろう。この地の種族は土葬だという。

トロンタン Torontan2995m で会った少女。
食事のための薪拾い、食事のしたく等、食べることのためにこの少女は、日に十時間も働く。

人と人を結ぶ。人と人がかかわる。その最も基本的な食事に、多くの時間を費やしていることと、この少女の美しさとは、深い相関関係があるようだ。(10/25)

第八日　10月24日　(日)
ヤンプーディン・Yamphudin(0720)　=　ドゥピ・バンジャン・Dupi　Bhanjyang(1125-1140)　=　オムジェ・コーラ・Omje　Khola(川のことをKholaという)(1240)

2つの岩石

いつもと同じ様に、今日もSirdarのDBさんとSHERPA二人と、私達三人が一足先にYamphudin　を出発した。Yamphudinの村からOmje　Kholaにいったん下り、木橋を渡る。
小さな尾根を越え、Dupi峠から落下する沢の右岸に取り付く。これもいつもと同じことだが1時間も歩かないうちに、後から出発したPorte　達、Kitchen　Helper達に追い抜かれる。

その道を登るとパァグラシの一軒家に出る。ここで、DBさんが一足先に行きますと言い残して、飛ぶように駆けていった。昼食の場所やテント設営等、指示をしたり準備をしたりする事が、いろいろあるようだ。

さらに登っていくと、平らな所に出た。道が二つに分かれている。 ヒマラヤのこんな奥に、道標などあるわけが無い。どちらの道を選ぶのかなと思いつつ、Kangchenjungaに来たのは今回が初めてだという若いSHERPA、ラクパ・ソナLakpa　Sonaさんの顔を覗く。 Lakpa　Sonaさん、にっこり笑って指さす。 ドピバンシャンと、カタカナ文字が、10　センチあるかないかの岩石に書かれて、そこにある。矢印も、勿論書いてある。

ドピバンシャンはDBさんのいうDupi　Bhanjyangである。さらに登りつづけ、小屋のあるカルカを過ぎるとDupi峠に着いた。峠からしばらく歩いた所で、こんどは樹林帯に入った。
二つ目の岩石、アムジェコラがあった。樹林帯を抜け下っていくと、再び、そのOmje　Khoiaの川に出た。左岸の道をまた登り木橋をわたり右岸の台地に着いた。
ここが今日のテント設営の、Omje　Kholaのカルカである。カタカナ文字の岩石道標。丁寧な細やかな思いやりである。久しぶりに味わう気がする。

紙づくりをするライ族

今日は珍しいことに、一日の行程の中で種族の違う三つの村を通ることになる。
グルン族の住むYamphudinの村を出て、山の上にあるシェルパ族の村に向かうわけだが、途中、山の斜面にライ族が住んでいる村がある。

村といっても、散在する家が十軒足らずの小さな村である。このライ族は紙づくりをする種族として知られている。ライスペーパーと呼ばれる紙は高山地帯のこのあたりで栽培されているロクタという植物を原料にしている。日本の和紙によく似ているところからロクタ紙とも呼ばれている。

話は変わるが、このネパールという国は、たくさんの種族が入り混じって生活をしている。ネパールにかなり詳しい人でも、この種族がいくつあるかは分からない。

ある学者は64という。またある学者は96ともいう。日本人で102という研究家さえいる。
ネパールという国が分かりにくいのは、ここに原因の一つがある。例えば、大晦日、正月ひとつとっても種族によって日が違うし、正月などまったくない種族もある。

かなり大きいお祭りの一つに、ティハールと呼ばれるお祭りがある。このお祭りは五日間あるのだが、この五日間の中味も種族によって大きく異なる。
祭りが主となる行事歴や宗教など、特に分かりにくい。

ニワトリ を Yanphudin に買いに行く

ニワトリを求めに、さっき一人Porte を行かせたので、帰ってきてから食事の準備に取り掛かる。そのため、今日は少し夕食が遅くなる、という。ここだと、どこまで買いに行くのですかと聞いてみたら、なんとYamphudinまで行かせたという。 Yamphudinから、ここOmje Kholaまで私達は、六時間もかかっている。途中にDupi Bhanjyangがあるからである。

頭の上、20～30センチにもおよぶ大きな重たい荷物を背負っても、彼らは、三時間もあれば登って来る事ができる。それでも二往復というのは、大変なことである。
DBさんの丁寧さには頭がさがる。

Yamphudin の ニワトリ で最後の Dasain

明日から、いよいよ本格的なトレッキングに入るので、Dasainの最後のお祭りを今晩しましょうとDBさんが言う。

Kathmanduでも食べられない、豪華なMenuが用意された。 チキンスープ、八宝菜と鶏肉、パパルー、ミックスサラダ（ニンジン、赤キャベツ、レタス）、ギョウザ、炒め物(白菜)、焼き鳥(七箇所の異なる場所の肉が長いクシにさしてある)、DBさんがロクシーRokshiと呼ばれるお酒をごちそうしてくれた。 デレデレ・ミト・ボヨ （とてもとても、おいしかった）

第九日 10月25日（月）
オムジェ・コーラ・Omje khola（0720） = ラミテ・バンジャン・Lamite Bhanjyang（1130） = ラッセ・カルカ（1145-1240） = シンバ・コーラ・Sinbua Khola = トロンタン・Torontan（1650）

雨が降れば小川ができ、風が吹けば山ができる、ヤーホー ヤホホホー

快晴。7時ちょっと過ぎにOmje Kholaを出発しTorontanに着いたのが4時55分。 約十時間。この中に昼食時間も入ってはいるが、かなりきつい一日だった。夕食の時、雨が降って来た。夕食

を終えてテントに戻った時、小降りの雨はうって変わって激しい雨になった。夜中の3時に起きた時,雨はやんでかなり冷え込んでいた。翌朝、雪が積もっていた。 晴れ後曇り後小雨後大雨の後雪。今日は忙しい一日でくたびれた。

１２５枚ある子どもの写真の一枚。深い話はもちろんできないが、どの子も十五分ぐらいの時間、会話していくと、すぐに私を受け入れ、まるごと心を開いてくる。

どうして高地に生きる子はこのように心が美しいのか…
これを知りたくて、ひまさえあれば子ども達の中に入っていった。

ママンケ Mamankhe からヤンプーディン Yamphudin に向かっているとき、山道で出会った姉妹。

第十日　10月26日　（火）
トロンタン・Torontan（2995m）（0715）　＝　シンバ・コーラ・Sinbua　Khola　＝　アンダペディ Andaphedi（1125-1220）　＝　ツェラム・Tseram（3890m）（1410）

ついに見た　Nepal　の花　ラリグラス　（　赤いシャクナゲ　）

Sinbua　kholaの右岸の樹林帯を緩やかに登っていく。歩きはじめた時降ったりやんだりしていた雪が、一時間、二時間、三時間と時間が経つごとに、本格的な横殴りの雪になってきた。
遠くの木々の方からどんどん雪化粧が始まった。登っていく道もだんだん狭くなってくる。
樹木だけでなく道のそばにある岩も、雪に埋まってきた。途中で、シャクナゲや松の高木が続いている樹林帯を通った。幹の太さが10センチを越えそうな、ピンク色をしたみごとなシャクナゲである。

30～40分、このシャクナゲの道を歩いた。 Nepal　の国花・ラリグラスは2500m以上の森林でよく見られる。それも森林限界の3800mまでだと、どこかで読んだことがあるがちょうどぴったりしている。 Torontanは2995m　Tseramは3890mである。
この木々全部に花が咲いたら・・・今日のこのコースは、まぎれもないシャクナゲ街道となる。

牛のしっぽが・・・私のテントが開かない

夜中の二時、四回目のトイレで目が覚める。さっきの牛はどうしているかな、と思いつつテントをそっと開ける。開ける・・・ではない。テントをそっと開けようとする。テントが開かない。もしやと、思いつつ、指で少しテント開け、思っている方をそっと覗く。やっぱり思っていたとおりだ。さっきの大きな牛がぐっすり寝ている。ぐっすり・・・ではない。もう一回覗いたら、目だけは開けた。やさしい目をしている。もう待てないのでちょっとだけ動いてくれ、とそっと手で合図をする。
この、ヒマラヤの牛、私の心が分かったようで、片足だけだがちょっとだけ動かしてくれた。

第十一日　10月27日（水）
ツェラム・Tseram（休養日・高度順応日）

私は高山病の経験者

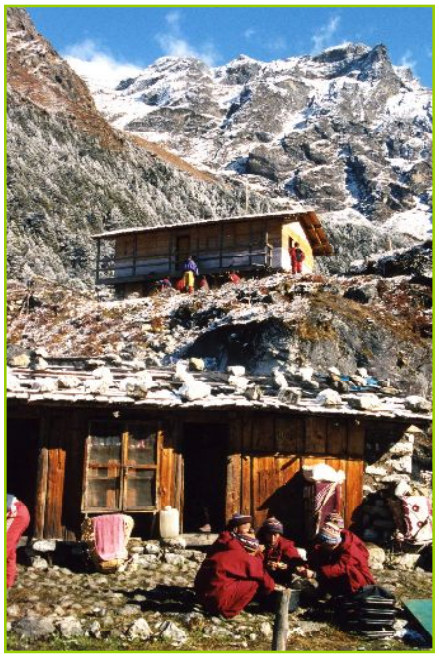
五十年の登山歴史の中で、私は三回も高山病を経験している。最初は三十代の時、南アルプス・悪沢岳（３１４６ｍ）、二回目は五十代、中国・横断山脈・ターク一ニャンシャン・大姑娘山（5025m）、三回目は六十代、ヒマラヤ山脈・カラパタール・Kala　Patthar（5545m）。
高山病といっても、一回目、二回目の時は、たいした事もなく過ぎた。三回目の時が、少しばかり大変だった。 ゴーキョ・ピークGokyo　Peak(5360m)は難なく登頂した。

次のKala　Patthaもまずまずの体調で登りきった。早い時間にテント場に帰ってきた。ここからが良くなかった。私の大好きな、ヌプツェNuptue（7864m）という山が、Mt　Everestのすぐ隣にある。このNuptueをもう一回見たくて、近くの山をそれもわずか50mあるかないかの小さな丘だが、いつもの様に登ってしまった。この、いつもの様に・・・がいけなかった。

２～３人乗りの小型ヘリで、Kathmanduまで運ばれてしまった。落ち込みながらも登山がこの後も続くことを考えて、これはこれで生かしていけば良いと明るく反省しようとしたことを今思い出している。

本日の昼食、　ヤク　の　ステーキ

今日は、今回のトレッキングで三回予定している高度順応日(高所順応日ともいう)の一回目である。高度順応とは高山病を避ける一つの方法で高度を上げないで、酸素の少ない場所に身体を適応させていくことをいう。今日のTseramは高度順応のための停滞日という事になる。



私達は、今日の一日をゆっくりと送ったがKook長のアントレさんはかなり忙しかったようだ。昼食、夕食、どちらもビックリするような献立を用意していた。
Kitchen　Helperを使わないで、朝、自分でヤクの肉を買いに行ったらしい。昼食はヤクのオンパレード・・・ヤクの一枚ステーキ、ヤクのサイコロステーキ、ヤクのギョウザ、どれも格別の味である。そしてタ食にはNepal定食を作ってくれた。Nepalの人は誰でも、このNepal定食（ダルバートタルカリ）を好んで食べるという。今まで、朝食昼食夕食いずれも日本風であった。
初めて食べるこのNepal定食・ダルバートタルカリ、おいしくておかわりまでしてしまった。

ツェラム Tseram38902m のキャンプ地。
ここで初めての高度順応を兼ねて休養をとる。(10/26)

なかなかやるじゃないか　六十歳なってから始めたわたしのカタコト英語

Lakpa　SonaさんとはTaplejung　Airfieldで会って今日が八日目。わずか八日とはいえ、テント生活の毎日である。衣食住の、食と住を毎日共にしていることになる。

一日6～7時間歩くトレッキングでも、SirdarのDBさんは、全体を指揮するために、私達に付き添えない時もあるが、SHERPAの彼はいつも私の前か私の隣にいる。そして、三人いる私達のなかで、私だけが彼と会話をする。会話は勿論英語である。

Kathmanduの学校を出ているので、彼も英語はなんとか話せる。若い彼のほうが発音はきれいだが、まあ同レベルというところか。とにかく、よく話す。彼は私の中に，心地よい形でどんどん入り込んでくる。私も、若い彼を教え子のように感じてしまう時もある。何年か先、彼がDBさんのように、人間のにおいのするすてきなSHERPAになることを願いつつ、かなり丁寧に接してきた。
私の中の、何がそうさせているのかは分からないが、彼が私に持ち始めている興味、関心は日に日に深くそして強くなっているようだ。
カタコト英語とはいえ、私のイギリス英語も生き生きしてきたではないか。

第十二日　10月28日　（木）
ツェラム・Tseram（0800）　＝　ヤルン・Yalung（0940）　＝　ラプサン・Lapsang（1100）　＝　ラムゼ・Ramze（4110m）（1305）

はじめて体験する雪山登山

18歳に始めた登山。途中できれることもなく続いて、ちょうど五十年になる。北は、羅臼岳、斜里岳、利尻岳から、南は宮之浦岳、永田岳に至るまで、登った山の数はおよそ550。
3000m、2000mの山はほとんど登った。特に避けてきた理由はないが、雪を踏んでの冬山登山は、機会がなく一度も行ったことがない。そんな私にとって初めてになる雪山登山が、このヒマラヤで生まれる。

3日間連続の雪で、道もすっかり白くなっている。二十分も歩かないうちに、道が消える。
岩の間をぬうようして登って行くわけだが、7～10mはありそうな丸みをしている大きな岩が左右前後にたくさんあって登る道が見つけにくい。Kangchenjungaが初めてだという若いSHERPAとMt　Everestのヒラリーステップまで登った経歴を持つ熟練SHERPAが、それぞれに道を探しに行く。

Mt　EverestのあるKhumbu　HimalやAnnapurna　Himalとは違って、ここKangchenjungaはいろいろな意味で、ヒマラヤ山脈の僻地でもある。道は見つからないようだが、さすが二人はSHERPA、落ち着いているしいつもと同じ和やかな顔をしている。十分経ったか二十分経ったか、しばらくして遠くに見え隠れするPorterを見つけた。思い出深い一日となった。

10回のトイレは・・・トイレの新記録

8時40分の一回目から始まって、10時、11時、12時と、はかった様に一時間寝るとトイレに起きる。富士山の高さを越えたTseram（3890m）　から利尿剤の一つであるダイヤモックスを飲み始めているせいもある。

雪の重さでテントが開けにくい。起きる度ごとに、雪が積もっていくのがよく分かる。気温、マイナス9度。かなり厳しい。それでも、何回も何回もトイレに起きていく。そして、寝袋に入る時また水を飲む。高度障害、高山病から自分の身を守るためである。高山病（Altitude　Sickness）は、薄い

酸素に慣れないうちに高地に登ったため、身体に変調をきたしさまざまな症状を起こす。

病気というより酸素欠乏症と考えた方が分かりやすい。4000m以上の高地では、重い軽いは別にして、半数以上のトレッカーが高山病にかかるといわれている。基本的な予防は、二つある。
一つは、ゆっくり登ること。 Kala Patthar での私の失敗は，ここにあった。

そして身体の変調に気がついたら、下山すること。もう一つは、脱水症状になりやすいので、一日3～5リットルの水は、必ず摂取すること。過去の経験から、私が意図的に取り組んでいるのがこれである。休憩したら、まず水を飲む。昼食の時でも、口に何かを入れる前にまず水を飲む。

これは昼も夜も関係ない。しかし夜のトイレは厳しい。朝 4 時、テントがいやに明るい。
外は完全に雪だけの世界。朝5時、雪は止んでいる。みごとな朝である。

ラムゼ Ramze4110m のキャンプ地が、すぐむこうに見えてきた。左の大きな山はラトン Rathong6678m。
一番右側にコクタン Kokthan6147m が見える。(10/28)

第十三日　10月29日（金）
ラムゼ・Ramze（0700）　＝　ヤルン氷河・Yalung　Gl（0800-0900）　＝　ラムゼ・Ramze（1000）

誰の演出　？　空に残る　G　の字

テントからすぐ向こうに見える、ラトン・Rathong（6678m）とコクタン・Kokktang（6147m）。
左のRathongと右のKokktangのちょうど真ん中に大きな星が、二つ縦に並んでいる。
真後ろは、満月が今夜だという月。平坦なテント場近くは、昨夜遅くに降った雪で、真っ白なジュウタン。

今、朝4時30分。満天の星が、少しずつ消えていく。5時10分。ペテルギュウスとリゲルのオリオン座を、五つの一等星がとり囲んでいる。おうし座のアルデバラン、ぎょしゃ座のカペラ、ふたご座のポルックス、小いぬ座のプロキオン、おおいぬ座のシリウス。
誰がしているのか、このみごとな、空の演出。

ヤクといっしょに一夜を明かす

朝、満天の星。そして今夜も、満天の星。じつにみごとである。そして月は満月。心静まり、時の刻みも緩く感じて・・・と言いたいところだが、昼に放したヤクがテントのあたりにもたくさん来ている。それも、五頭や十頭なら、これはこれで詩の世界に入る事もできる。目の良いSHERPAのLakpa Sonaさんに聞いてみたら、そのヤクの数およそ六十～七十頭。夜もテントの外から低い鈴の音が聞こえてくる。8 時。私が寝付くまで、やっこさん動いている。月明かりさえあれば、ヤクは夜でも目が見えるのだろうか。

ヤルン氷河 Yalung Gl.を約１時間登ってゆく。奥に見える白い連山が、カンチェンジュンガ Kangchenjunga8586m。

真ん中に立っているのがディビさん。(10/29)

ヤルン氷河 Yalung Gl.の上から、むこうの白銀のカンチェンジュンガ Kangcjenjunga8586m を望む。

第十四日　10月30日　(土)
ラムゼ・Ramze(0810)　=　ラプサン・Lapsang　=　ミルギン・ラへの分岐(1105-1200)　=　ジョル・ポカリ(双子池のキャンプサイト)・Jor　Pokhari(1430)

三角のおにぎり

今回のTrekkingで初めてのお弁当である。今日のコースが急登の連続で、昼食場所が取れないからである。ムッシュ・アントレさんは、どんなお弁当を作ってくれたのかな、とワクワクしながら開けてみた。

私達がよく見る、三角のおにぎりである。形のよい三角にはびっくりしてしまった。Nepal　風の焼肉が添えられている。そして、きれいに6等分されたオレンジがデザートである。やっぱり、アントレさんだ。

ヤルン氷河 Yalung Gl.の基点近くのラムゼ Ramze4110m から、二日前に登ってきた道を逆にラプサン Lapsang、ヤルン Yalung と下ってゆく。途中から足場も良くない急斜面を今度は長時間上る。サーダーであるディビさんは、誰かには「下を見ない方が良いですよ」といい、私には「上を見ない方が良いですよ」と助言する程の坂が続く。

シネラプチェ・ラ Sinelapche La4640 手前のジョル・ポカリ Jor Pokhari でテントを張る。(10/30)

第十五日　10月31日　（日）
ジョル・ポカリ・Jor　Pokhari（0715）　＝　シネラプチェ・ラ・Sinelapche　La(4640mこのような高い峠のことをLaという。低い峠のBhanjyangと分けて使われる)（0930）　＝　ミルギン・ラMirgin　La（1030）　＝　ミルギン・ラ・サウス・Mirgin　La　South（巨岩のあるキャンプサイト）（1145）

ヒマラヤのブナ立尾根

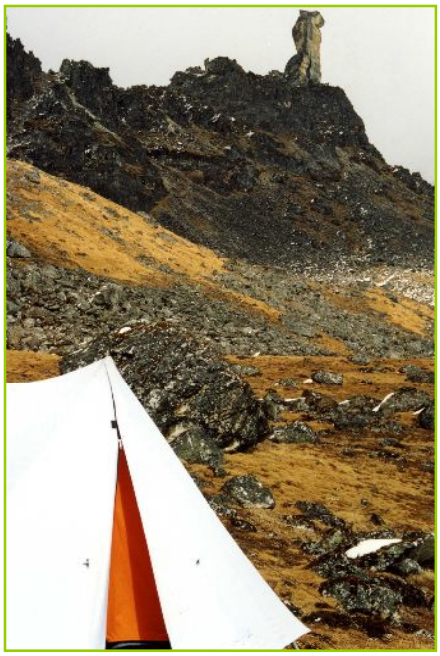
昨日の昼頃から降り始めた雪も夜半には止んでよかった。Tseramを左に見下ろしながらYalungからJor　Pokhariへと登った昨日の急登は、かなりきつかった。
そして今日の登りは、さらにきついという。上を見てはだめですよ、とDB　さんが笑いながらいう。

きつい急登は、なにもヒマラヤだけのものではなく、日本にだっていくらでもある。すぐ思いつくのが、北アルプス三大急登の一つであるブナ立尾根。七倉から高瀬ダムに入り、濁沢つり橋を渡った所からこのブナ立尾根が始まる。烏帽子小屋に向かう急登に次ぐ急登で、樹林の中をふうふう言いながら登ったことがある。ここヒマラヤの急登は、それと比べると距離が長い。そしてもう少し勾配がある。多少の違いはあるにしても、ゆっくり登れば同じようなものである。とはいえ、上り始めのJor　Pokhariがすでに4400mである。

Sinelapche　La、Mirgin　Laと登っていくわけだから、それなりの心の準備は必要である。
最初の 1～2時間は、小さく砕けた岩混じりの道。スリップしながらの登りなのでかなり怖い。
次の1～2時間は、凍りついた大きな岩の道。動く岩こそないが雪もあり、これはこれでなかなか怖い。そして次の2～3時間が、新雪の登り。ラッセルするほどではないが、前を行くSHERPAの足跡をそのまま踏んでいかないと大変な事になる。長く続いた緊張でけっこうくたびれた。
怖くて見損なってしまったが、後ろは六千mクラスの山が、五つや六つはあったはずである。

なかなかジャヌー　Jannu　は顔を見せない

誰も歩いていない新雪の中を、たっぷり歩いてMirgin　Laに着いた。そこからほんの少し20～30mも登れば、待望のJannu（7710m）を見る事ができる。



膝まですっぽり入ってしまうラッセルが始まった。あと10m。大きな岩が重なりあっているこの辺りは、雪も多くかなり危険である。下からガスもあがってくる。結局そこに踏みとどまって、ガスの切れるのを待つことにした。20分、30分。ガスは切れそうで切れない。40分。切れない。明朝もう一度来ることにして、 Mirgin　La　Sout　のテント場に向かった。

ミルギン・ラ Mirgin La を越え、降り積もった雪道を２０～３０分下ったところに、絶好のテント場がある。
シンガポールのマーライオンに似た、巨岩が良く見える場所だ。（10/31）

タモ・ラ Tamo La からジャヌーJannu7710mを遠く見る。
手前のルンタ（祈願の旗）は人間が生きていくうえで、欠くことのできないものを旗の色に象徴させている。

赤は「火」、黄は「大地」、緑は「水」、白は「風」（この風を白に象徴させる意味はむずかしい。一冊の本が書けるほど奥深いものがある）
ここにはないが、あと青がある。「太陽・星・天」のことを意味している(10/31)

第十六日　11月1日（月）
ミルギン・ラ・Mirgin La South（0735）＝シネラプチェ・ラ・Sinelapche La ＝ミルギン・ラ・Mirgin La South（1145）＝ミルギン・ラ・Mirgin La（1055-1120）＝シェレレ・Shielele （1420-1450）＝タモ・ラ・Tamo La（1710）＝グンサ・Ghunsa（1930）

Jannuを見に、再度Mirgin Laへ

晴れ。うきうきしながら、Mirgin Laまで上り返しJannuに会いに行く。あと5～6メートル。
岩と岩との隙間がどうなっているのか雪で見にくい。登れば、北東すぐそこにJannuが見えるはずだ。あと5～6メートルがどうしても登れずJannuは見ることができなかった。そのかわり空がきれいなので、北西はるか向こうにMt, Everest（8848m）、ローツェLhotse（8516m）、少し離れて三角形のマカルーMakalu（8463m）がはっきり見える。

闇のなかのTrekking

今日のTrekkingの歩行時間は七時間。予定が計画通りにいったものとして、道中の様子を綴ればこうなる。 Mirgin Laまで上り返し、峠から岩尾根を下る。右から流れ込む水流沿いにさらに下って行き、右岸へ渡る。平坦地に出る。ここがShieleleのカルカである。

岩小屋と石積小屋のある気持ちのよいキャンプ地でもある。ここで昼食をとる。ここからGhunsaまでの下りは、約三時間。キャンプ地北側の乗越しから、岩のゴロゴロした山腹を緩く下りながら巻いていく。石積塚のある小さな尾根を越すと急斜面の下りとなる。石楠花の木が現われ、岩峰の間を抜け、さらに下っていくとTamo Laに着く。
ここからダケカンバの急坂をジグザグに急下降すると、平坦地に着く。さらに進み右手Jannu氷河から流れてくるヤマタリ・コーラーYamatari Kholaを木橋で渡る。右岸沿いに下っていけばGhunsaの村に出る。

ところが、計画が大きくくずれてしまい、道中の綴りも大きく変わることになる。原因は、Mirgin Laへ引き返し昨日見なかったJannuを見に行ったことにある。昨夜遅くに、また雪が降ったため、ラッセルに時間がかかり過ぎ、ここで二時間を要してしまった。そしてこのような高地では、ゆっくり歩くことが大切で、時間が多くかかることは良しとしても時間を縮めたりすることはできない。

昼食を終えてShieleleのカルカを出発したのは2時50分である。4時までは見えていた道の段差

や岩や石ころなどが、4時を境に、急に見にくくなってきた。5時をまわると、足元はほとんど見えない。かろうじて識別できるものといったら、前方の、空の黒よりさらに黒いのが木のかたまりであることぐらいである。今夜に限って月がない。星もない。若いSHERPAが、私の手を取ってリードしようとするが、なかなか足が前に出ない。私の軽いリュックも、すでに彼のリュックの上にある。時々後ろから届いていた声も、いつのまにか消えてしまった。少し離れてしまったようだ。

多分一番後ろでもベテランSHERPAが手を貸しているのだろう。NepalのSHERPAの視力は4．0とどこかで聞いた事がある。少しは見えているのだろうか。
私は、全くの暗闇の中にいる。前方は、天井の低いトンネルにも見えるし、不思議な国のアリスの、あの穴の様にも見える。暗黒の闇こそが光のほんとうの価値を教えてくれる。
聖書のどこかで読んだことがあるが、光の無い空間にいたこの一時間半は、言語に尽くせない貴重な体験となった。Ghunsaに私が着いたのは6時15分。一番後ろのSHERPAは6時40分。

第十七日　11月2日　（火）
グンサ　Ghunsa　（　予備日　）

ニワトリにかぶせてあるPorterの背負い籠

食料や燃料を三十日分用意して、移動していく事はできない。今回のトレッキングのちょうど中間点にあたる、このGhunsaがまた新しい出発点にもなる。

このGhunsaからパンペマPangpemaに向かい、そしてまたこのGhunsaまで六日間かけて帰ってくる。この間の食料、燃料等を、今までのPorteとは別のPorterが運び上げてくれた。
運び上げてくれた、と文章で書いてしまうと、わずか一行になってしまうが、この事実を知ると下げた頭があがらなくなる。彼らは重い荷物を背負って来るわけだが、KathmanduからTaplejungまでバスと徒歩利用で七日間はかかる。そこから、このGhnusaまで登って来るわけである。
Ghunsaは標高3795mで富士山とほぼ同じである。彼らにとってはたいした高さではないとはいえ、このGhunsaまでは、六日間は必要である。ありがたくて涙が出てくる。

陽気の良い昼下がり。庭の真ん中に置かれているムシロにうつ伏せになったまま、30～40分、私はそこにいる。すぐ隣に円錐形をした大きなPorteの背負い籠がある。私はそれを見ている。誰の籠だろうか。こんな使い方もあるのだな、と感心しながら逆さまに置かれた、その籠を見つづけている。籠の中には、動き回っているニワトリが二羽いる。Porterたちへの、私達からのありがとうの気持ちを込めたプレゼントである。

ニワトリをいただく・・・いただきます

今回のようにトレッキングが長いと、長い分だけ生活が原始的になっていく。今日で十六日、風呂に入っていない。これが原始的といえるかどうかは判らないが、今現在の普通の生活ではない。

衣食住の衣でいえば、中間点のGhunsaまでの衣類は、山シャツ　1、山歩き用パンツ　1、半袖シャツ　3、下着用パンツ　3、厚手ソックス　1、ソックス　3、フリース　1、タイツ　1、手拭　2、この他35日通しての帽子　3、手袋　2、バンダナ　1、羽毛服　1、ウインドヤッケ　1、オーバーズボン　1、ゴア製雨具　1、全行程がテントを移動させてのトレッキングであるから、ごく普通である。きれいか、汚いか、におうか、臭わないかの世界ではない。15日間、朝昼、そして夜と、衣類はこ

れだけで済ましてきたわけである。

衣食住の食でいえば、食物の蛋白源一つとっても、道中で必要に応じて、求めていかなければならないものもある。ヒマラヤの山には、電気が無い。暗くなったら寝る。そして明るくなるか、ニワトリが鳴くかしたら起きる。このニワトリといえば、この Ghunsa のニワトリは、あのMamankheのニワトリから数えていくと、七羽目になる。このニワトリは、私が昼間長いこと眺めていた、あのニワトリである。このニワトリも、あのニワトリも、命のある、生きているニワトリである。ここの生活はじつに原始的である。いただきます。今、生きているあなたのその生命を、いただきます。私は生かされている。23人の Porter、Ghunsaのニワトリ、心にまた一つ灯がともる。

第十八日 11月3日 (水)
グンサ・Ghunsa(0750) = グンサ・コーラの木橋・Ghunsa Khola(1225-1340) = ランブク・カルカ・Rambuk Kharka = カンバチェン・Kambachen(1500)

グンサ Ghunsa3795mから、グンサ・コーラ Ghunsa Khola にそって、ランブク・カルカ Rambuk Kharka を通り、カンバチェン Kambachen へと登ってゆく。
途中でジャヌーJannu7710m の、たとえようのない、美しい姿を何度となく見ることが出来た(11/3)

Ghunsa Kholaの丸石

私達のテント場から、10mと離れていない道の真ん中に、メンダン(マニ石の長い壁)が横たわっている。何枚も写真を撮ってGhunsaの村を出発する。樹林帯を抜け、支流を三本ほど越え100～150mほどのガレ場を抜け、いったん河原に降りる。再び樹林帯に入り、支流を二本横切ると、丸石のごろごろした河原歩きになる。

直径が5～20mほどの大きな丸石がちらっと一目見ただけで20～30個はある。川幅はさほどではないが、この石の多さとその大きさに圧倒される。高い山もみごとであるが、この大きな石とともにあるGhunsa Kholaもみごとなものである。ヒマラヤの河は、やはりヒマラヤの河でスケールが大きい。

すっかり身についた山側歩行

大きな丸石を抱えたGhunsa Kholaに、圧倒されながら登り続けていくと、何度も何度も樹林帯に入る。その樹林帯を抜けて支流を越えると、決まったようにガレ場に出る。
このガレ場のスケールに、またまた圧倒されてしまう。かなり急斜面を横に巻く様に登っていくわけだが、その距離がとにかく長い。道幅は狭く、両足を揃えることができない所がたくさんある。登りが緩やかなのでなんとか足を運ばすことができるが、右足でも左足でもどちらかスリップさせたら、もうおしまいである。

100m下のGhunsa Kholaまでガレ場は続いている。落石一つあってもだめである。息をころして慎重に歩を進める。このガレ場のおかげで、谷側の足をかなり意識しながら、できるだけ山側を歩くという山側歩行のコツを会得できたような気がする。
道幅が広くても、斜面が急な時はいつでもこの山側歩行は活きてくる。

右も左も、前も後ろも　4000m、5000m、6000mの山ばかり

5000m、6000mともなると、どの山も白い雪をしっかりとかぶっている。同じ位の高さの山はたくさんあるので、どの山も無名峰でこんなに高くても名前はついていない。30分～50分歩くと、一つ山を通り越す感じがする。近づくにつれ、高かった山がだんだん低く見える。じつに不思議である。

たしかに登ってはいるが、ここまで来ると、一日に登る高度差も最大700m位におさえているので、それほど登ってはいない。不思議といえば、4000m、5000mの山は、どれもここより低く見える。今いる所は富士山より高いが、4000mは越えていない。近くにある6000mの山も、険しい角張った形はしているが、物見山より低く見える。物見山は私の住んでいる毛呂山町にある375mの山である。

高さのことが言いたくて、物見山を引き合いに出してしまったが、もちろん物見山のイメージとはまったく異なる。低くは見えても、どの山も雪をしっかりかぶってどっしりしている。視界に入っている山は、いつも20～30はある。そして、これも不思議なことだが、私が、どの山の裾野にも立っているような、そんな感じがしてくる。

第十九日　11月4日　（木）
カンバチェン・Kambachen（0800）　＝　ラムタン・Ramtang（1150-1300）　＝　ロナーク・Lhonak（1520）

Kambachen　のテント場から見ている山

東側、左からジャヌーJannu(7710m)、ソビトンジェSobithongie（6669m）、カブルーKhabur（6332m）、西側に右から、シャルプーSharphu Ⅰ峰（7070m）、Sharphu Ⅱ峰（6164m）そして、北東に　メラ・ピークMerra　Peak（6335m）、どの山もすぐ目の前にある。

どの山も雪で、完全に真っ白い。どの山も、美しく見事である。一番近い距離にあるMerra　Peakはあまり近すぎて、すでに途中まで登って来ているような、そんな錯覚すらしてしまいそうである。力のある登山家なら、二時間もあれば上まで行けそうにも見える。

Lhonak　のテント場から見ている山

テント場のすぐわきに横たわる、カンチェンジュンガ氷河Kangchenjunga　Gl。その上流には、テント・ピークTent　Peak(Kirant　Chuli7365m)とネパール・ピークNepal　Peak（7168m）が立ちはだかり、右上には、ウェッジ・ピークWedge　Peak(Chng　Himal6750m)の頂きが鋭く天を突いている。空は、青よりも青く、雪は、白よりも白い。

第二十日　11月5日（金）
ロナーク・Lhonak（0745）　＝　パンペマ・Pangpema（Kangchenjunga　B. C5510m）（1245）

とうとう念願のKangchenjunga　Gl. に来た

今日は最終目的地のPangpemaに入る日である。
Lhonakから約四時間、半日行程で到達できる。高山病にも充分注意しながら、ゆっくり行動し、丁寧に味わいながら登ることにする。キャンプ地から、短いアブレーション・バレーを抜けて段丘を行く。やがて200m程のガレ場を通過して、再びアブレーション・バレーに入る。

パンペマ Pangpema5510m のキャンプ地。
ここはカンチェンジュンガ Kangchengjunga のベースキャンプのひとつである。
右側の二つの山がツインズ The Twins7350m、左に半分見えるのがネパール・ピーク Nepal Peak7168m。(11/5)

進むにつれて丸石のゴロゴロした中を歩くようになる。左からの岩の押し出しを越え、大岩の間をケルンを目印に進んでいく。前方のKangchenjunga Glの奥に、待望のKangchenjunga (8586m)が見え始める。道は草地から砂地に変わり、ほぼ平坦な段丘をたどれば、広々とした Pangpemaのカルカに着く。LhonakからPangpemaまで五時間かかった。

砂利の道一時間、砂の道一時間、丸石の道一時間、角張った岩の道一時間、そして雪の道一時間。
GhunsaからGhunsa Kholaに沿いながらKambachen、Lhonak、Pangpemaと三日間かけて登ってきた。Ghunsa Kholaのたどり着いた所が、今自分が立っているKangchenjunga Gl である。感動を言葉にしたいが、それができない。

Kangchenjunga(8586m)の左に、ツインズThe Twins(Gimmigela Chuli7350m)、 その左に、ネパール・ピークNepal Peak(7168m)、さらに、テント・ピークTent Peak(7365m) と、どれもが手にとるような近さで、そこにある。

カモシカが、約三十匹のカモシカが・・・私達を見つめている

山で働くネパール人の眼光は鋭く、遠くまで良く見えると言う。突然、SHERPAが左斜面、上の方を指さす。見つけるまで、少し時間がかかった。山の稜線に何匹かカモシカいる。どのカモシカも動かず、直立したままじっと私達を見つめている。しばらく時間が経つと、稜線のずっと下の方にもいるのがわかる。何匹位いるかとSHERPA に聞いたら、三十匹はいますとのこと。
もしかしたらあのカモシカ達、右手の山から今しがた届いた朝の光を見ているのかもしれない。
どのカモシカもそうであるが、真っ直ぐに伸びた前足二本だけが、朝日を受けて白く輝いている。

360度の大パノラマ

Pangpema(Kangchenjunga BC)の背後の丘陵を、ゆっくりと登っていく。
一時間、また一時間。 Kangchenjunga Glを見下ろしながら、360度ぐるりと広がるヒマラヤ山脈の真ん中に、この私は立っている。
Nepal Peak(7168m)、The Twins(7350m)、Kangchenjunga(8586m)、ヤルンカンYalung Kang(8505m)、ウェッジ・ピークWedge Peak(6750m)、シャルプーSharphu I峰(7070m)、ドゥロモーDrohmo(6850m)、ダイナミックに広がる大パノラマ。

この私がここにいる。この私が、今ここに立っている。生命をいただいてから、68年の歳月が流れて行った。そして たくさんの人に出会えてきた。その・・・たくさんの人の・・・誰か一人に・・・出会えてなかったとしたら、この私はここにいない。
この私は、今ここに立っていない。そんな気がする。

第二十一日　11月6日　（土）
パンペマPangpema(Kangchenjunga　BC)(0730)　＝　カンチェンジュンガ氷河(ビューポイント)Kangchenjunga　Gl(0900-0940)　＝　パンペマPangpema(1040)

Kangchenjunga　Glに立つ

今回のTrekkingでは、計画を立て始めた時から、私は山の頂きよりも氷河にとりつかれていた。

眼下にカンチェンジュンガ氷河 Kanchenjunga Gl.が上の方にのびている。左の山がツインズ The Twins7350m で、右の方がカンチェンジュンガ Kanchenjunga8586m である。

一枚のこの写真からは想像もできないが、今、私は３６０度の大パノラマの中に立っている。

ネパール・ピーク Nepal Peak7168m、ツインズ The Twins8350m 、カンチェンジュンガ Kangchenjunga8586m 、ヤルン・カン Yalung Kang8505m、ウエッジ・ピーク Wedge Peak6750m、シャルプーSharpbu7070m、ドゥロモーDurohma6850m

少しここから場所を変えればテント・ピーク Tent Peak7365m も見えるのです。(11/6)

このKangchenjunga　Glは、どうしても自分の足で立ってみたい場所の一つであった。
昼食前の休憩時間にそれが実現した。もちろん私一人では行けないので、私一人にDBさんと　Lakpaさんの二人が付き添ってくれた。
40分下って氷河の中に入った。砕けた岩と砂利と砂と雪と氷が混ざり合って、長い年月を経ている。それも一年とか十年とか百年とかの単位ではなく、十万年とか一億年とか十億年とかの単位であるような気がする。自然は深くて、大きくて、温かくて、そして厳しい。

五十年の私の登山史を変えた　Pangpema

五千メートルを越えての登山は何度かあるが、宿泊地が五千メートルを越えたのは、過去に一度もない。しかも二泊。 Pangpemaの標高は5100mである。 KangchenjungaとKangchenjunga　Gl　をじっくりと味わうために、このPangpemaの宿泊は最初から二泊を計画していた。

さすがに夜は冷え、気温はマイナス13度までさがった。冬用の厚いフェルトのジャージ、冬用のしっかりした羽毛服を含めて六枚着用して、寒さをしのいだ。
7～8回テントの外に出るトイレがつらかった。この寒さとこの雪で、顔は一皮すでにむけている。

あとで知ったことだが・・・1995年・・・

このPangpemaあたりまで来ると、テントを張る場所も限られてくる。 DBさんはこれまで四回、このKangchenjungaに来ているが、Pangpemaでテントを張るのはいつもこの場所だという。
たいした量ではないが、昨夜も雪が降った。この辺りは雪の多い所である。 DBさんから聞いて、あとで知ったことだが、私達がテントを張った、この同じ場所で、1995年、日本人三人とネパール人四人が命を落としてしまったという。

昨日私達が登った、あの丘陵からの雪崩が、テントを埋めてしまったとのこと。私達のテント設営で心配はなかったのですか、と聞いてみたら、向こう一週間雪はあっても大雪にはならないはずです、とDBさん、プロの顔で答える。

「カンチェンジュンガ氷河 Kangchenjunga Gl.の上に立ち、歩く」
このトレッキングでの私の努力目標のひとつでもあった。
私一人にシェルパ、サーダーと二人が付き添ってくれて、数十万年前から、そこに存在していた大氷河の上に立てた。
その足元から撮った氷河の一枚である。(11/6)

第二十二日　11月7日（日）
パンペマ・Pangpema(0730) ＝ ロナーク・Lhonak(1045) ＝ (昼食 1100-1130) ＝ ラムタン・Ramtang ＝ カンバチェン・Kambachen(1540)

私達とDBさん、四人で、ネパール式のお祈りをする

早朝、 Pangpemaを出発する時、いっしょにお祈りしてください、とDBさんに声をかけられる。
DBさんがそのお祈りのことについてくわしく話してくれた。
1997年のことである。その時DBさんは、kangchenjunga登頂をいどむ日本人五人のSirdarとして、このPangpemaまで来ていた。
このPangpemaからの登りが大変である事をよく知っているDBさんが、C1まで荷物を運びましょうかと、この五人に何度か話しかけたそうです。このPangpemaからは自分達だけの力でやってみたいという気持ちが、この五人には強かったらしく、このPangpemaでDB さんとは別れたそうです。

五人とも登頂することは出来たけれども、下山途中で二人は亡くなり、残りの三人も軍用ヘリでなんとか助かったそうです。疲労が原因だったのではないかと私は思います。つらそうな顔をして思い返しているDBさんでした。

Dhupiと呼ばれる木の葉に火をつけ、その火を今度はSunpatiと呼ばれる木の葉につけます。
そこから火をもらった線香二本を両手に持ち、左回りに三回、ゆっくりと歩きます。
私は、亡くなった私の友人にするように、ていねいに、ていねいに、お祈りしました。
こんな偶然もあるのでしょうか。助かった三人のなかの一人とは、私は三回も会っているのです。

Kangchenjunga Gl. は大きくて長い

氷河から20～30mほど離れた道を、氷河に沿いながら緩やかに下る。
朝から快晴。前方にShrphuが全部そろって見える。 SharphuⅢ峰、SharphuⅡ峰、SharphuⅠ峰(7070m)、SharphuⅣ峰、見事としか言い様がない。
二時間程下ってまだ氷河は続いているが、SharphuⅠ峰が手前の六千mクラスの山に隠れる。

さらに30分ほど下ると、Lhonakに着く。ここでSharphuⅡ峰が見えなくなる。なおも氷河に沿って下り続けていくと、Lhonak Glから流れてくる水がKangchenjunga Glに合流する所にでる。
ここからさらに一時間歩く。 氷河の終わりを見届けたい、と思っているわけだが、氷河はあいかわ

らず続いている。この Kangchenjunga Gl は、想像をはるかに越えている。大きくて、長い氷河である。 しだいに道は氷河から遠ざかり、Ramtangを経由して今日の宿泊予定地Kambachenに着く。 氷河にそっての今日一日の歩き、32082歩。

第二十三日 11月8日 (月)
カンバチェン・Kambachen(0730) = ランブク・カルカ・Rambuk Kharka = グンサ・コーラ Ghunsa khola = グンサ・Ghunsa(1230-1355) = フェレ・Phere(1545)

グンサ・コーラ Ghunsa Kholaの水

緑・・・違う。青・・・違う。この水の、美しい色を言葉で言い表す事などできるわけがない。
千年前の、十万年前の、一億年前の、はるか遠い昔に積もった雪が、大地のぬくもりと、太陽の日ざしを受けて一つの滴となる。 Kangchenjunga GlからNupchu Glから、その滴が生まれ、生まれた滴が寄り添ってGhunsa Kholaの水となる。その滴が極上の美しさを生んだとしても何も不思議はない。

Trekking に入って二十日が過ぎるが、雪には何度か合ってきたが、雨がわずか一回だけであったことも幸いしている。 LhonakとRamtangのちょうど中間あたりでKangchenjunga Glは終り、そこからGhunsa Kholaが始まる。 Kambachenを出発しRambuk Kharka、Ghunsa、Phereと今日のテント設営のPhereまで約七時間。

このGhunsa Kholaの水に、私の目は、私の魂は、吸い取られ続けてきた。 Kangchenjunga Glは、Kangchenjunga Glの滴はやはり神なのかもしれない。
Kangchenjunga、この綴りの持つ意味の深さも興味深い。イギリスの、ある登山家が調べたように、私もいつか調べてみよう。

第二十四日 11月9日 (火)
フェレ・Phere(0730) = キャプラ・Kyap La(1035-1150) = タンゲム・Tangem(1400) = アムジラッサ・Amjilassa(1640)

ここに咲く 深山(みやま)の花は 地(ち)に適(かな)い
時期(とき)に適いて ただに美し

葉はショウジョバカマにそっくり。花はウツボグサ、マツムシソウによく似ていて少し小ぶり。空の青とまったく同じ青の色で咲いている。
半日陰の中で、どうしてあの空の、あの青の色を、生み出せるのだろう。 Amjilassa のテント場にたどり着くまでの20～30分間はススキの尾根を歩き続ける。

背丈は、日本で見るのよりやや高め。紫色に、銀を混ぜた色が鮮やかである。風で揺れると、夕日を受けてその穂が紫に光る。
ここに咲く深山の花は、地に適い、時期に適いて、ただに美し。

今日九日はNepalの大晦日、アントレさんがまたまた・・・

ここAmjilassaでとうとう七羽目になるニワトリが、食卓を飾ることになる。 アントレさんがまたまた腕をふるう。夕食メニューは以下の通り。チキンスープ、パパルー、春巻き、ピザ、白いご飯、ピー

マンを主にした野菜炒め、だいこんを主にした野菜炒め、焼き鳥、果物、いつもながらごうせいな献立である。

春巻き・・・二十センチ近くあるウルトラ春巻き、ピざ・・・直径三十センチは越えるウルトラピザ、中身はいろいろな物が数えきれないほど入っている。
焼き鳥・・・かなり長めの串に、それぞれ場所の違う肉が五切れ、肉の間にピーマン、ニンジン、玉ねぎが入っている。これまたウルトラ焼き鳥。
どこにもおいしかったとは、書かなかったが、そのどれもが極上の味であることは言うまでもない。

第二十五日　11月10日（水）
アムジラッサ・Amjilassa（.735）　=　ガイヤバリ・Ghaiyabari（1100-1230）　=
セカトム・Sekathm（1440）

一番鳥のコケコッコー

4時40分、一番鳥がコケコッコーと力強く朝を告げる。一、二度鳴くと　しばらく休む。五分近くたつと、また鳴く。鳥の鳴き声で目覚め、起き、そして活動を始める。何十年ぶりの体験だろう。
5時15分、まだ鳴いている。一番鳥といったが、雄は一匹しかいないようだ。

さあ、いい朝が来たぞと先ほどと同じ音調で、コケコッコーとまた鳴く。あちこちでまだ眠っているゾプキョ、牛、犬、ヤギ、雌の鶏、そして人間、すべての生き物達に聞こえるように、それもせかせるような鳴き方ではなく、一呼吸おきながら一回一回ていねいに鳴く。

5時30分、まだ続いている。5時35分、まだ鳴いている。あと5分で一時間鳴き続けたことになる。一番鳥の縄張りのここには、まだ目覚めていない生き物がいるのかもしれない。それにしても、やさしい起こし方だ。6時、今度は私達のモーニング・コール。熱くて甘い紅茶が運ばれてくる。今日はどんなすてきな出会いがあるのだろう。まだやまないコケコッコー。もうみんな起きましたよ、と声をかけに行こうか。
自然とは、想像をはるかに越えた、意味深いものをその中に持っているような気がする。

五百メートルはありそうな、それも垂直に流れる滝

Ghunsa　Kholaから800m～900m上のAmjilassaを出発し、すぐ下りにはいる。Ghunsa　Kholaをめざしていっきに下る感じである。朝日がさす前の、上から見るGhunsa　Kholaの水も美しい。

Ghunsaの村からずっとGhunsa　Kholaの右岸を歩き続けてきたが、ここでひとつ大きな沢を越え左岸に出る。ここからがきつい。何せ、50度～60度もありそうな急勾配の坂を、約一時間かけて上る。また、800m～900mは上ったような気がする。大きな山がいくつも折り重なる中を流れるGhunsa　Kholaに、高く昇った太陽の、強い光が射し込む。これまた美しい。

対岸に大きな滝が見えてくる。水が落ちる滝ではなく、岩の地はだを流れる滝である。滝の長さは、屋久島の大川（おおこ）の滝の4～5倍はありそうだ。しかも、その大きな岩山は、ほとんど垂直にそびえ立っている。まるでそれを確かめるかのように、また50度～60度の坂を下り始めた。

40分余りで降りきりGhunsa Kholaをまた渡って、右岸をわずかに上りながら歩く。間違いなく、この滝は、長さ500mを越えている。見事な美しさである・・・と、いったんはこう書きとめたが、見ている目と、感じている心に何か違和感を覚える。神秘な・・・という言葉しか思いつかない。

ヒマラヤ山脈の下山は登りながら下山する

昨日のPhereからKyap La、Tangemを通ってAmjilassaの下山も、下り時間より登り時間の方が2倍近く多い。今日の行程のAmjilassa、Lamatar、Ghaiyabari、Sekathumも7時間下ってきたが、登りに半分以上の4時間をかけている。

ここの下山は、登り時間の方が下り時間より多くかかる。ヒマラヤ山脈ならではのことである。山ひとつの大きさが大きすぎることと、険しい沢を越えながらの下山が、その理由である。
テント設営地のSekathumから、出発地のAmjilassaがよく見える。
大きな山が二つある。7 時間の下山が山二つとは、大きな山である。

大海へと向かうGhunsa Kholaの水

二日前のKambachenから、ずっと魅惑され続けているGhunsa Khola。
ある時は木橋で渡り、ある時は千メートル上から見下ろしてきたGhunsa Khola。 谷間にまだ日の届かない時のGhunsa Khola。また、強い陽射しをまともに受けている時のGhunsa Khola。 会う度ごとに、私の心をひきつけていくGhunsa Khola。

いつの日か、私が朽ち果て、私の身が消え入る時、私の魂は、もしかしたらこのGhunsa Kholaの水に溶け込んでいくのかもしれない。私の魂が溶け込んだ、そのGhunsa Kholaの水は、ひとつ沢が加わるごとに、その水量を豊かにして大海へと向かうような、そんな気がする。
いつしか河の流れは、ゆるやかな海の流れとなる。ゆったりと、止むことなく、どこかに向かって流れて行く。そういえば、作家の五木寛之氏も、人の死後をこれと似たように描いていたようにも思う。
Ghunsa Kholaの水の源流はKangchenjunga Glである。Kangchenjungaに積もり続けた雪は、何万年、何億年という長い時間の中で、大地が与えるぬくみの恵みと、もう一つ太陽が与える光の恵み、この二つをともに受けぽとりと溶け落ちて一つの滴となる。
その滴が寄り添ってGhunsa Kholaの水となる。今日のテント設営地がGhunsa Kholaの水の流れがすぐそばで聞きとれるSekathumとは、なんと幸せなことだろう。

第二十六日 11月11日 （木）
セカトム・Sekathum（0735） = タペトック・Tapetokku（1130-1225） = チルワ・Chirwa（1415）

Yalung Gl. の滴がKangchenjunga Gl. の滴に寄り添う

グンサ・コーラGhunsa Kholaの水の流れを心地よく聞きながら、昨夜は眠りについた。そして今朝も、このGhunsa Kholaの水の流れる音で目が覚めた。Sekathumは心に深く残るテント地となりそうだ。このSekathumを出発しすぐにGhunsa Kholaを渡る。
一時間ほど急坂を登る。そして今度はいっきに下り始める。沢にぶつかるな、と思っていたらSinbua Kholaに出会う。この河は、どこまでもさかのぼっていけば、Trekking八日目に大きな感嘆

の声をあげたYalung Gl になる。

Yalung Glの滴がSinbua Kholaの水となり、Kangchenjunga Glの滴よりなるGhunsa Kholaの水に加わっていく。10m程度だった川幅が、いっきに広がり20m近くになる。
Ghunsa Kholaを真横から見たり、はるか上の方から真下に見たりしながら、五時間アップダウンを繰り返す。川幅も 30m～40m に広がり、小さな河が大きな河になり始めている。神秘な美しさには変わりがない。

昼食に、にぎり寿司が登場する

ムッシュ・アントレさん、やるとは聞いていたが、ここはヒマラヤ山脈の山中である。食材も限られているなかで、よくも、日本風のにぎり寿司が作れるものかと感心してしまう。
DBさんに毎回食事が楽しみですよと言ったら、あと二日ありますよ、と笑顔といっしょに返事が返ってくる。フランスの登山家のいくつかのグループが、三ヶ月とか、六ヶ月とかの長期のヒマラヤ登山にはいる時には、Cook長はアントレさんに決めているという。分かるような気がする。

今晩の夕食は・・・まさか・・・

Ghunsa Kholaにかかる長いつり橋に心をひき付けられ、昼食後のひととき、自慢のEOS7で写真を撮りまくっている。 DB さんと Kitchen Staffの一人が、そのつり橋を渡って対岸に向かっている。何処へ行くのかな、と興味深げに見ていると、橋の向こう側の大きな山を巻くようにしてどんどん歩いていく。大きな山なのに、二人とも Nepa人だけあって、十五分もしないうちに山の向こう側に消えてしまう。

二人の姿が見えている時はなんとも思わなかったのに、消えた瞬間、もしかしたら・・・と思った。そしてすぐに、まさか・・・と思った。30分～40分して、二人は Ghunsa Kholaの長いつり橋に帰ってきた。Kitchen Staffは、八匹目の鶏をしっかりと抱え持っていた。後で夕食メニューを知ったら、またびっくりするだろう。アントレさんの料理で、びっくりしていることは二つある。ひとつは、作ったものが、ことごとくおいしいこと。そしていまひとつは、同じ食材を使っても、同じ料理は出てこないこと。
ここで、アントレさんの料理のほうが、普段私が日本で食べている物より、味が格段上であるものをあげてみるとかなりたくさんある。参考までに、おいしくて、しかも珍しい料理もあげておく。

焼き鳥、チキンスープ、チキンカツ、茶わん蒸、春巻き、カレーライス、ミックスカレーライス、炊き込み御飯、マッシュルームスープ、餃子、すき焼き、Vegetableスープ、豚カツ、しゃぶしゃぶ、ピザ、三角おにぎり、ケーキ、餃子（ヤクの肉）、チベット風餃子、サイコロステーキ（ヤクの肉）、ステーキ（ヤクの肉）、焼き山羊、水牛の肉（トンバのつまみ）、ネパール定食、SHRPAシチューヤンボYambok（ホットケーキに似ている）

第二十七日 11月12日（金）
チルワ・Chirwa（0730） = タワ・Tawa（0930） = シヌワ・Sinwa（1125-1225） = ミトルン・Mitlung（14.20）

彼等との別れに、そのための心の準備が必要になってくる

誰かと、共にする何かで出会う。そしてしばらく、時を共有して過ごす。そしていつかは、別れる。

精一杯送ったはずだから、それでよいはずなのに、今回は別れがつらすぎる。
Mitlung、Taplejung、あと二日しか残っていない。私は、彼等にとって何だったのだろう。花が実をつけるのに、その手助けとなる蜂やあぶに、この私がなれたのだろうか。
花が着実に実をつけるのに、その手助けとなる風に、この私がなれたのだろうか。
彼等によって、私は、さわやかな風となりえたのだろうか。できることなら、このままでいたい。

人は･･･支えられて、かろうじて生きている、とつくづく思う

「とうとう、三十五泊かけて、念願のKangchenjungaに行ってきました。自分の足でYalung Glの上にも立ちました。Kangchenjunga Glも、自分の足で歩いてきました。」今回のTrekking を象徴的に綴ると上のような文になる。自分の足で立ちました。自分の足で歩いてきました。たしかにそのとおりであるが、登山歴がちょうど五十年になる今の私には、この文章の裏側に、二十行あるいは三十行にもおよぶ文章を添え足さないと、このような二行の文章は書けない。

およそ三十日の宿泊のテントは、高所Porter達が運び上げてくれたし、朝昼夜の食事は全部、Cook長と Kitchen Staffが作ってくれた。食材から燃料にいたるまで、彼等が全部運んだ。その日の夜に使用する、寒さをしのぐ寝袋もジャンパーも替え着も、すべてPorterの世話になっている。

わずか三人の私達を支えてくれたポーターは、全部で23人、キッチン・ヘルパー7人、シェルパ2人、サーダー1人、これもヒマラヤの山中で直接世話になった人達だけである。
今回のKangchenjunga Regionは、ヒマラヤ山脈の一番東側に位置しているため、かなり秘境な地域である。それと長期にわたることもあって、コース設定の計画段階から、たくさんの人の世話になってきた。

Kangchenjungaに Kangchenjunga Glに、行ってきましたという事と、Kangchenjungaで、Kangchenjunga Glで、たくさんの人に会いましたという事は、同じことかもしれない。

11月12日の今日は雌牛のお祭りの日

予定通りいくと、あと残り日はわずか二日。Chirwaを七時半に出発。すぐ登りに入る。
五十分近く登ったが、50度～60度もある今までのような坂はもうない。多分Ghunsa Kholaを上から見下ろすのも、これが最後かなと思いつつ眺める。

対岸のいくつかの滝は、200m～300m位と短くなっている。山が少しずつ小さくなってきているからである。短くなっている、とつい書いてしまったが、これはいままでの長い滝と比べてのことで、屋久島の大川（おおこ）の滝が落差88mであるから、これはこれでかなりの滝なのである。

そこからまたGhunsa Kholaの水がさわれる下まで降り、そこで昼食をとる。ここまで下山したから、もうここからはたいした登りはないはずだと思い込んでいたら、四十五度傾斜の岩を組んで作った長い階段が現われた。数えてみたら、なんと126段もあるではないか。でもそのおかげで、太陽の日でぎらぎら輝くGhunsa Kholaの水を、上からもう一回見ることができた。

途中Sinwaを通り過ぎるとき、きれいな、花の首飾りをしている牛に会う。DBさんに聞いたら、今日は雌牛のお祭りの日だと言う。この山地だけでなくNepal全土どこでも、雌牛にはSayapatriの花

（マリーゴールドに似ている）の首飾りをするそうだ。11月10日　カラス、11月11日　犬、11月12日　雌牛、11月13日　雄牛、11月14日　人間と、五日間にわたるお祭りでティハールTIHARと呼ばれる。 ダサインDASHAIN　の次に大きいお祭りで、学校はもちろん休みである。

キャンプ地Mitlungでティハールと呼ばれるお祭りに出会う

月明かりもないのであたりは真っ暗である。七時ちょっと過ぎ、小高い山の中腹に、小さな灯かりが見える。見え隠れしながらその灯かりがだんだん山から下りてくる。目が慣れてくると、遠く右の方からも、後ろからも、灯かりが近づいて来る。村人達がお祭り広場に集まってきた。
13～14人いるが男衆ばかりで、女性が一人もいない。今日は雌牛のお祭りの日で、明日が雄牛のお祭りなのでそのせいかな、と思いつつ若い村人の一人に確かめる。言葉ではきちんと通じてはいないはずだが、身振りと笑顔でよく分かる。もうしばらくしたらここに来る、とていねいに教えてくれる。

子供達と女性が集まってきて、いよいよにぎやかなお祭りが始まった。一人小さな太鼓をたたく人がいるだけで、あとは全部手拍子である。二人のときもある、五人位のときもある、ぐるりと車座に座ったその中で、彼等のいうネパールダンスを踊る。何回も何回も、メンバーを変えて、同じ曲で、同じダンスを踊り続ける。何人かが私の腕をつかんで、いっしょに踊れと誘う。共に楽しんだひと時があっという間に過ぎていった。

ネパール風の提灯とでも名づけたくなる、その灯かりが、揺れながらだんだん遠のいていく。山の右手に一つ、山の左手の方にも一つ。このMitlungの村には12～13軒の家があるそうだ。

第二十八日　11月13日　（土）
ミトルン・Mitlung（0730）　＝　アサンパティAsahangpati（1100-1200）　＝　プレジュン飛行場・Taplejung　Airfield（1540）

下山の最終日、山の端が朝焼けで染まる

昨夜　Mitlung　の村人達と、TIHARのお祭りで共に踊った広場に今私は立っている。
昨夜の騒ぎがうそのように、辺りは静まりかえっている。
あと一，二時間もすれば、ここMitlungに別れを告げTaplejung　Airfieldに向かって最後の下山に入る。山の端が朝焼けで染まっている。静かな朝である。

最後の下山は、下りがなくて全部上り

最終日の下山では、これがヒマラヤ山脈なのです、と思い知らされた。
地図の上で、Taplejung　AirfieldはMitlungより900m高い位置にある。当然登りはあるわけで、少しぐらい登ったからといって、別段これで驚く事はない。びっくりしたのは、朝七時半に出発してTaplejung　Airfieldに三時半に到着するまで、全行程、下りが全くなく上りだけである。
下りが全くない下山、ここ、ヒマラヤで初めて経験する。

大きなどんぶりばちを逆さにしたような山の、一番下がMitlungのテント地である。そこから山を巻かないで、まっすぐ上に登っていく。頂上にTaplejung　Airfieldがあることになっているが、四時間位の登りでは山が大きすぎて、それを見ることはできない。頂上まであと2時間位のところで、やっと真上にある白い旗が見える。まっすぐ登って登って登ってMitlungの下から八時間かけてたどり

着く。これが最終日の、下りの無い下山とは、つらかったけれども、うれしくなってくる。ヒマラヤ山脈は奥深い。

第二十九日　11月14日（日）
タプレジュン飛行場　Taplejung　Airfield

Tomba　のつまみが水牛の肉

今日は、ティハールTIHAR　お祭りの最終日である。SHERPAのラクパさんと、Porterの一人がいうには、今日はお祭りで飛行機は来ないとか。そんなこともあって、朝からトンバの酒祝いになってしまった。とうとう彼等と過ごす最後の日が来てしまった。

Kitchen　Helperは明日の朝食の用意で残りそうだが、Porter達は明朝早くにここを立つ予定である。ここから2時間かけてTaplejungの村まで下り、そこからバスを乗り継いでKathmanduまで行く。三日はかかるそうだ。　DBさんがTombaのつまみにと、めずらしい水牛の肉を持ってくる。今回のトレッキングではいろいろな種類の肉に有り付けた。鶏、豚、牛、ヤク、ヤギ、水牛、そのどれもが、それぞれにおいしかった。

空港の中でネパールダンスが始まる

空港の中に敷物を持ち込んで、車座になったかと思うと、すぐ音楽が鳴り出し、ネパールダンスが始まる。ここに一組、あそこに一組。ここから見えないが丘の向こう側にも一組踊っているはずだ。空港の近くに住むこの人達にとっては、山の続きであるこの空港は、共有の土地というわけだ。DBさんとSHERPAのラクパさんが夕食等の仕事がないとみえ、いっしょに入り込んで踊っている。

私達の最後の夕食とティハールTIHALの最後のお祭りが重なる

最後の夕食は、やはり鶏の料理をもってきた。激しい活動が連日続いている私達に、新鮮な蛋白源といったら、この山の中では鶏しか手に入らない。これが最後の、九羽目となる鶏である。チキンスープがおいしくて、三回もおかわりをした。そして、アントレさんの手作りの特製ケーキが最後にやってきた。甘さをひかえたケーキのおいしさといったら、もう驚嘆の一語である。道具も整わないこのヒマラヤ山中で、どうしてこのような物を創り出せるのだろうか。これがプロなのか。

第三十日　11月15日（月）
タプレジュン飛行場　Taplejung　Airfield

今日も飛行機が飛んでこない

ここTaplejung　Airfieldでは薄日がさすが、Kathmanduの天候は悪く飛行機は、ルクラLhuklaにも飛んでいないらしい。八時から待機していて、もうじき二時間になるが、動きが全くない。こんなことはNapalではありふれたことらしく、私達三人を除くと誰もが平然としている。11時30分、本日は飛行しないとの連絡が入る。

DBさんの判断で早朝の出発を見合わせたPorter達は、隣の飛行場に寝転がって日光浴を楽しんでいる。そしてその野原には犬や鶏といっしょにヤギまで加わって、のどかな風景をつくっている。近くに住む女性二人が、臼と杵を運び出してきた。何をするのかと観ていたら、干してあるヒエをつ

き始めた。トンバTongbaを作っているのだ。近くで見ていたPorter達が、二人三人と寄ってきて手伝い始めた。ヒマラヤ山脈にある空港Taplejung　Airfieldは、やはり住民との共有地であるように思える。

笑い声と歌声が絶えないKitchen　Staff

一度荷作りまでした料理の材料を全部取り出して、予定外の昼食の準備にとりかかっているKitchen　Staff。 Flightが予定通り朝来ていれば、彼等はKathmanduに向けて、徒歩とバスでもう途中まで行っているはずである。

こんなことはよくあることよ、といわんばかりに喜々として働いている。
笑い声と歌声の絶えない、さわやかな雰囲気が伝わってくる。

第三十一日　11月16日　（火）
タプレジュン飛行場・Taplejung　Airfield（1330）　=　タプレジュン・Taplejung（1500）

今日こそTaplejung　Airfieldに飛行機は来てくれるか

八時、こちらTaplejung　Airfieldは朝から雲の動きがよく、天気は良くなりそう。 DBさんに今日は大丈夫ですよね、と言ったら、多分・・・でもKathmanduの天候がどうかな、という返事。
九時、来れば今日は早くに飛ぶとの情報もあり、すでに三日間も、ここTaplejung　Airfieldに足止めさせられている韓国の登山家の人達が、荷物を移動させている。

Kitchen　Helper　たちの荷物も全部かたづけ終わって、それぞれが背負う大きな籠が外に並んでいる。彼等も飛行場の中に座り込んで、飛んでくるはずの方向を長いこと見つめている。
十時、Kathmanduの天候が良くないという連絡が入る。霧が濃くて、飛行機が飛び立てないとのこと。
十一時、カトマンドゥ空港Kathmandu　Airportの空は晴れた。こんどは途中の天候が良くなくて飛び立てない。乗客はすでに乗っていてそのまま待機しているという。
十二時、その後の新しい情報もなし。動き全くなし。
午後一時、Kathmandu　Airportで待機中の飛行機は、途中の天候が回復しないため今日は飛ばないという連絡が入ってくる。

カンチェンジュンガKangchenjungaは、そんなにたやすくは、私を帰さない

午後1時15分、明日、明後日を待っても飛行機が来ないことも考えられる、とのサーダーSirdarの判断で、すぐTaplejungの村に下りることになる。明朝、徒歩とバスで二日間かけてビラトナガールBiratnagaに向かう事に予定を変更する。 BiratnagarとKathmanduは比較的飛行が容易なのである。

4日程計画の中に盛り込んでおいた予備日のうち、二日間がTaplejung　Airfieldの飛行機待ちでなくなる。そして残りの二日間は、明日からのバス下山で消える。 ヤルン氷河Yalung　GIの登りもカンチェンジュンガ氷河Kangchenjunga　GIの登りも、雪にこそあっているが、まずまずの天候で予備日をすべて残せたことが、結果的にはLuckeyであった。
この分だと、もしかしたら　Kathmanduに一泊もできず、風呂にも入れないまま日本に帰ることになるかもしれない。明朝五時半のバスに乗るので、起床は四時半。

第三十二日　11月17日（水）
タプレジュン・Taplejung ＝ フィディム・Phidim ＝ ビルタモーデ・Birtamode

一日乗りっぱなしのバス下山、なんと二十七時間

こぼれ落ちそうに、空にはたくさんの星がある。夜明けはまだまだで、星の明かりだけでは足元も良く見えない。ヘッドランプを頼りに、三十分程歩いてバスの発着所に着く。予定通りの五時半、外のライトだけでなくバスの中のライトも全部つけて、頑強なNepalのバスが発車する。

七時半と十時に、峠でトイレ休憩がある。十二時、運転手が昼食をとるため、三十分バスが止まる。食事のできそうな店が三，四軒ある。私達もすぐできるというヌードルと少し固めの白いご飯を食べる。お腹には入ったが、どちらもおいしくはない。

ゆっくりした速度で、またバスは走る。たしかに山は大きいが、午前中でまだ五つか六つ位しか越えていない。大きな石があちこちに転がっている。それに加えて、ぬかるみを走った時にできた、固くて深いわだちが、ところどころにある。そのためバスはねんがらねんじゅう減速する。減速も減速で時速五キロに、あるときは時速二キロにもなる。それでも横転しそうでひやひやする。

三回目のエンストがある。タイヤが石を弾いて、その大きな石が車のエンジン部分に当たったらしい。こんな時は、いつも乗客のほとんどの人はバスから降りる。そして自分にできる手助けを、何かはする。二人や三人、車に少しくわしいのか、バスの下にもぐる人までいる。一回目のエンストのときは、ここまで三十日余りTrekkingは順調に来たけれど、最後に来てツイテナイなと、一瞬そう思った。でも、ここまでくると、すべてが見えてきた。

車が運悪く故障したのではなく、もともと故障しながら走る車に、私達が乗ったのである。この頑強そうに見えるNepalのバスは、何回かのエンストをしながら走る車である。そしてもう一つ、このバスにたびたび乗るNepal人は、エンストは普通の事だと思い込んでいる。喜んでいるかどうかは分からないが、少なくともがっかりはしていない。エンストは全部で五回あったが、四回目が最悪であった。

先ほどトイレ休憩をした所から登り道になっている。上り始めてまだ二，三十分もしない所で、また大きな石を跳ね上げてしまった。車の下にもぐって、鉄の棒か何かであちこち叩く音も聞こえるし、ギアをバックに入れたりローにしたり、いろいろ試みるが、今回のエンストだけは復活の兆しがない。そうこうしているうちに、坂の上からバスが一台、ダンプが二台来てしまった。助けようとしているのか、どの車もライトをつけたままにして、こちらの車の動くのを、かなりの時間辛抱強く待っている。

四回目のエンストは完全なエンストでる。試みたすべてが駄目で、結局そのままバックで降りることになる。さいわい傾斜があるので車は動かせるが、真っ暗な中でのバックは、なかなか難儀で大変である。バスの中には、数人のNepal人と私達三人が残っているだけで、あとはみんな真っ暗闇の中で、それぞれが何かをしている。後輪が谷側に近づいた時など、運転手にそれを教えようとストップ，ストップと、種類の違う叫び声が、いろんな所からしてくる。

かなりの時間を費やして、先ほどの休憩場所までどうにか戻ることができた。これから修理するので、しばらく時間がかかるという。もちろんこんな山の中に、修理工場などあるわけないし、ガソリン

スタンドだってない。気の短い人は、とてもじゃないけど、このNepalでは生きていけない。ローソクのある食堂が一軒だけあって、そこで、のんびり夕食をとる。食べ終わって、さらに大分時間がたってから、何人かのPoterと、何人かのKitchen Helper、それにラクパさんがいないのに気がつく。

車をバックで移動させた時、みんなバスに乗ったと思ったが、乗らないで外にいた人たちが、何人かいたわけだ。急いでDBさんを見つける。 DBさんは、すべて、事の成り行きを知っているようで、いつもと変わらない顔をしている。「マオイストですか」 と、よっぽど聞こうと思ったけれども聞くのはやめた。今回のTrekkingを計画したり、検討したりしているときから、このマオイストの件は何度か話題になった。

この、マオイスト（極左共産党）の活動の対象は、主に政府機関であって、外国旅行者への暴力行動は過去にはみられない。それでも、現地警察、軍隊、集会には近づかないようにしよう。空港での写真は今回控えよう。出くわした時には慎重に対処しよう。お互いの目標の一つにすることにした。

十九時、何人かの仲間がいないまま、バスが出発する。また坂を登りながら走り、先ほどエンソトした辺りを通過しようとしたその時、車を止められてしまう。肩に銃を掛けている二人が、バスのまん前にいる。 DBさんが一人だけ、車から降りる。バスのそばでしばらく話していたようだが、どこかへ行った。車を止めた二人とは、また別の二人が、銃を持ったままバスの中に入ってきた。一人はまだ若く、二十歳にも成っていないようだがいやに威張っている。
二，三十分は経っただろうか、 DBさんがPorter二人とKitchen Helper二人、それにラクパさんを連れて帰ってくる。

私だけではなく、バスの中にいる誰もがほっとした。ここですぐにバスが出るかと思っていたら、ラクパさんのポケットに入っていたらしい、小型のカメラの件で、何かあるらしく、また DB さんがバスから降りていった。このたぐいの事を、ここに書いたらきりがない。とにかく、いろんな事がこの後もあって、予定の終着駅フィディム Phidimに到着したのは、六時間遅れの二十四時ちょっと過ぎ。

DB さんが、どのようにバスの運転手に頼んだかは分からないが、運転手は、この Phidimで食事を取り、少し仮眠をしてその後なら、ビルタモーデBirtamodeまで行ってくれるという。
運転手が食事を取り、仮眠している間、私達も眠れれば一番良いのだが、エンジンを止めそして暖房も切ってしまった車の中は、寒すぎて眠れるどころではない。運転手が出てきて、再度ハンドルを握ったのが、夜中の三時である。 Nepalの運転手はバスと同じで強い。

第三十三日　11月18日　（木）
ビルタモーデ・Birtamode ＝ ビラトナガール飛行場・Biratnagar Airfield ＝ カトマンドゥ空港・Kathmandu Airport ＝ カトマンドゥ・Kathmandu

Green Mountain サヨナラ、Blue Mountain サヨナラ、サヨナラWhite Mountain
三時に出発したバスはBirtamodeに向かって、なおも山を降り続ける。四時、五時、六時、いくら走っても山から出ない。 PhidimもBirtamodeもTaplejungから見て、ちょうど真南の方角にある。バスは昨日の早朝五時半にTaplejungの村を出発して、南に南にと延々と下ってきたわけである。

何度かあった休憩時はもとより、バスの中でも、何時も私が観ているものは、下りてきた北の方の山である。今しがた下りてきたその山がGreen Mountainである。その山の、はるか向こうにある山々がBlue Mountainである。そしてKangchenjungaの山並みのある、あの一番奥の山脈が私のいうWhite Mountainである。
Green Mountainサヨナラ、Blue Mountain サヨナラ、サヨナラ White Mountain、

アクシデントにあって、大変なことになっているのに、この私は・・・

Taplejung Airfieldで予定通り飛行機に乗ったとしたらKathmanduまで約一時間で着いている。直行便がなくBiratnagarを経由したとしても、一時間半もあれば充分いける。こちらバスの方は、今Birtamodeに向かっているところである。そこからBiratnagarまでは、三輪自転車とタクシーに乗って 2 時間余りかかる。ここから綴る七，八行の文章の中味は、どうして，その時、そのように思ったのか、自分でもよく分からない不思議な思いである。

その１、一日目に飛行機が飛んでこなくて、翌日待ちになった。そして二日目も飛んでこなかったとき、がっかりする気持ちが、全くない。

その２、三日目も飛んでこなくて、飛行機なら一時間で行けるところを、徒歩とバスで二日間かけて行くことに、予定を変更したときも、がっかりした気持ちが、全くない。

その３、バスがしばしばエンストを起こし、四回目のときなど、予定の時間を、完全に狂わしてしまった。そのエンストでさえ、がっかりする気持ちは、少しもない。むしろ心のどこかでは喜んでいる。正確にいえば、一回目のエンストの時、ツイテナイなと、ほんの一瞬思ったが、すぐその後、気持ちはウキウキしている。

その４、予想外の二十七時間。しかも寒くてほとんど眠れず、身体はくたくたに疲れているのにもかかわらず、私の心はかなり充足している。どうして私は、がっかりしないのだろう。私と仲間の二人とは、このアクシデントに限っては、その時々の思いにかなりの隔たりがあった。二人とも、この時ばかりはさえない顔をしていたし、がっかりした言動も多かった。どうして私だけが、がっかりしないのだろう。なぜだろう。

二十七時間もバスに乗った私に、神様がくれたご褒美

気がつくと、バスが下っていく南の方には山が無くなり、小さい丘がまるで段々畑のように、ずうっと向こうの方までつながっている。太陽が上ってくる。なんと雄大な景色だろう。この景色の広がり、雄大さはどんな言葉を当てて言い表すのだろう。妻の田舎が新潟なので、私は日本海の夕日を見ることが多い。はるか遠くにある水平線の向こうに、太陽が赤みを増しながら沈んでいく、あの風景である。海岸に立っている私と、はるか遠くにある水平線までの距離を、二倍すると、今、私が見ている景色の広がり、雄大さに何とかなりそうだ。

バスはまだ大きな山の中腹辺りの高い所にいる。小さな丘が幾つも幾つもつながりながら、長くて緩やかな斜面をつくっている。その、はるか遠くにある地平線の向こうから、太陽が上った。雲に隠れているわけでもないのに、神秘な太陽は、茜色をしたまま上ってくる。二，三十分もすれば、まぶしい、いつもの黄色の太陽になるはずなのに、いつまでも茜色のまま上りつづけている。雄大な、

そして幻想的な景色の中で、私は、この神秘な太陽をずっと観つづけている。四十分が経過した。

まだ茜色をしている。太陽の光が欲しいのは、私たち動植物だけでなく大地も同じで、この、上り始めの太陽の光を、大事に受け止めようと待っている大地が、あまりにも広すぎるからなのだろうか。五十分が経ち六十分が経った。呼吸している息が消えてしまいそうな、みごとな朝である。まぶしくなって、凝視していた目を閉じたのは、さらに二十分が経過してからであった。

第三十四日　11月19日　（金）
カトマンドゥ　Kathmandu　　バンコク　Bangkok

私の残りの人生に、大きな意味を持つことになりそうな、今回の一期一会
今回のTrekkingが長期にわたった事と、リーダーを含めて世話をしてくれた人が全部Nepalの人たちであったことが幸いして、生き方の上で、尊いものが一つ会得できそうな気がする。

一つの用語でそれを、あえて置き換えると、誠実という言葉になる。今まで気がつきもしなかったが、誠実そのものが、今まで私が日本でとらえていたものと、今みているそれとは、何か一つ違うような気がする。その国々の持つ長い歴史や文化の違いからくるのかNepalの人たちが共通に持っている誠実さは、私が見てきた今までの誠実さとは、少し違う。

もっと濃いとか、もっと深いとか、というような量的ものでなく、質の上で何か違うように思う。私の文章力では、この後、さらに深めながら綴っていくことは無理なので、ここで止めるが、私の中には、新しいさわやかな風が吹き込んできている。

二十三人のNepalのポーターたち、有難う。
　七人のNepalのキッチンスタッフたち、有難う。
　　二人のNepalシェルパの方々、有難う。
　　NepalのサーダーDBさん、有難う。
　　Nepalの皆さん、本当に有難う。

どうしてこれほどまでに美しい目をして、私を見つめてくれるのかこの子供達
今回のTrekkingでは、高所に住む子供達の写真を撮ることも、目標の一つにしていた。今回に限ったことではないが、こうした高い山に登るといつも私は、そこで出会う人たちに深く感動する。高所に生活する人たちの顔の表情や目の輝きの美しさに、見とれてしまうのである。
どうしてそうなのかは、いずれは解いてみたい宿題の一つでもある。

そんな事から今回は、意図的に、子供達の写真を撮りまくった。子供達とはよくおしゃべりもしたし、遊んだりもした。ある時は五分、ある時は十分、またある時は三十分と、楽しいひと時を過ごした。自分でも驚いているが、撮った写真は全部で百二十五枚もある。そしてそのどれもが、予想していたとおり美しい目をしている。この写真を見ているだけで、私の心まで澄んでくるようなそんな気がする。

子供達のこの写真は、私の持ち物の中でも、とびきり貴重な財産の一つになりそうである。
堅物な私を変容させてしまう、五色の旗ルンタ

１960年、昭和35年に新卒で都内の中学校に勤めた私が、1999年、平成10年に退職するまでの三十九年、大事に守りつづけた事が一つある。

中間試験や期末試験のとき、手書きで問題作成をしてきた事である。つまり流行していたワープロ、パソコンを活用しないで、文字はすべて自分の手で書いた、ということである。退職する五，六年前には、私のほかにもう一人ぐらい、手書きの先生がいたが、いつのまにか私が、この便利な機器を使えない、最後の人になってしまった。

テストを受ける生徒の側からみたら、文字は読みにくいし、文章は曲がっているし、いい迷惑である。それを充分承知しながら、最後の最後まで手書きのままできてしまった。人には言わないが、文字には個性を残しておきたい、という思いが強くあったからである。今年の年賀状も、もちろん手書きである。

かたくなに、それを守りつづけてきたはずなのに、今、私はパソコンを使って文字を書いている。
Kangchenjungaの紀行文を書きたい･･･この思いだけで始めたパソコンなのである。この紀行文の、はじめに、で始まるわずか十二行を完成させるのに、四日間もかかっている。
メールを開くこともできない私にとっては、カンチェンジュンガのチェとか、ジュという文字を引き出すのは、至難のことである。

思いもしなかった、キイを叩いて文字を書く、というもう一人の私が、ここで誕生してしまったわけである。今、私の中で、激しく変容していることが、もう一つある。今回のこの登山は、私の趣味の中では一番古く、もう五十年にもなるが、私にはこの他に大事にしている、囲碁という趣味がある。こちらの方は、始めてからちょうど四十年になる。大好きで、いつも碁石は離せないでいる。山に来ている時だけは無理だが、その時以外はいつでも碁を打っている。病気で入院したときも含めて、今まで、碁石を握らなかった日が三日続いた、という記憶はない。とにかく、ねんがらねんじゅう、相手がいてもいなくても関係なく、楽しんで碁を打っている。

そんな私が、十一月二十日を境に、突然変わってしまった。一週間、碁石を握らない私が存在している。一ヶ月、寂しがりもしないで、囲碁をしていない私がここにいる。この、パソコンとこの、囲碁の変容ぶりには、私自身もびっくりしている。 Kangchenjungaへの思い入れが大きかったからである。 Kangchenjungaの残像が強すぎるからである。

Kangchenjungaの空(青)が、Kangchenjungaの風(白)が、Kangchenjungaの火(赤)が、Kangchenjungaの水(緑)が、そしてKangchenjungaの地(黄)が私を変容させてしまうのである。

第三十五日　11月20日（土）
バンコク　Bangkok　　成田空港　Narita　Airport

字引にあるとおり･･･私は、めぐり合わせのよい、果報者
私の家族は、五人の孫を含めて総勢十三人になる。その時、だれか一人でも病気か何かで体の具合が悪ければ、私はカンチェンジュンガの山脈に立つことはできなかった。
私の兄弟は五人、家内の兄弟は六人いる。もしもその時、この中の一人が、重い病気か何かで入

院でもする事になったら、私は、カンチェンジュンガの氷河を歩くことはできなかった。私にかかわるすべての人が健康であった、という幸運なひと時があったから、それと同時に、私にかかわっているすべての事が、整い熟していた、という幸運な時にあたっていたから、私はカンチェンジュンガの白い風にあたれたのである。

今回のトレッキングは四人で計画してきた。この計画を中心になって進めてきた一人が、出発間際に、参加を断念した。母親の体の具合が悪くなってしまったのである。

カンチェンジュンガ　Kangchenjunga　は、私にとって何だったのだろう

今回のトレッキングで、メモしておいた、書きとめておきたいものは、これですべて書き記した。
三十五泊にも及んだカンチェンジュンガKangchenjungaの旅は、私にとって何だったのだろう。
Kangchenjungaの白い風が、私に見える所まで私を運んでくれたおかげで、見えてきたものがいくつかある。
これらはどれも、私にとっては、前に一歩、歩を進めるのに必要条件でもあるので書き加えておくが、ここからは、私だけの私個人の紀行文である。

あやまらなければならない事が、父に一つある。母にも一つある。

なんとしても、あやまらなければならない事が、父と母に、ひとつずつある。
深く頭をさげて、全身全霊、身も心も私のすべてをもって、ごめんなさい、と許しを乞うてもそれだけでは許してもらえないほど大きな過ちを、私はしている。
どうしても、きちんとした何かをすることで、あやまらなければ、前に一歩、歩を進めることができない。私があやまる、その父は、その母はもういない。

父は、1985年、昭和六十年、病院で、たった一人で死んでいった。七十四歳、私が四十八歳の時である。この時、気がついてざんげをしていれば、母にはそうしないですんだはずである。
母は、2001年、平成十三年、やはり病院で、やはりたった一人で死んでいった。八十五歳。その時、私は、六十四歳なのである。

死んでしまった父に、死んでしまった母に、私が会って、許しを乞うことはもうできない。私がこの世に生を受けたその時、私のすぐそばに母がいた。私に一番近いところに母がいた。自らの力では何ひとつできない、生の誕生の時、私は、母の胸に抱かれ、母の腕の中にいた。

私の、生が、ただの一度であるように、母の死も、ただの一度であるというのに、私は母の死の、その時母のそばにいてあげなかった。自らの力では何もできない、死を迎えようとしているその時、どうして私の腕の中に、私の胸に母を抱かなかったのか。その母が自らの命と引き換えにしてでも、私に教えようとしていたものが、やっとここにきて見えてきた。
Kangchenjungaの白い風が、私に見えるところまでこの私を運んでくれたに違いない。

誠実、感謝そして風

今まで、見ようとしてもどうしても見えなかったものが、ここにきて少しずつだが見えてきました。
もう少し奥の方まで見たいので、がらりと、見る視点を変えてみました。
七色の、あの美しい虹の色を借りました。そして、この七種の純色に、私の好きな色、白も加えてみました。 Kangchenjungaの山脈で私が見てきた貴重なものがこの純色の、どの色と重なり合う

のか。

Kangchenjungaの氷河に立って、私が感じた貴重なことが、この虹の、何色と重なるのか。
この試みは、私にとっては、かなり心浮き立つことでもあったので、長い時間をかけてみました。
誠実・・・緑。感謝・・・青と黄色と赤。風・・・白。不満が存在しない（不満を抱かない、とは違う）ひたむきな誠実、この歩みが、あのKangchenjungaの登攀と重なるというのであろうか。

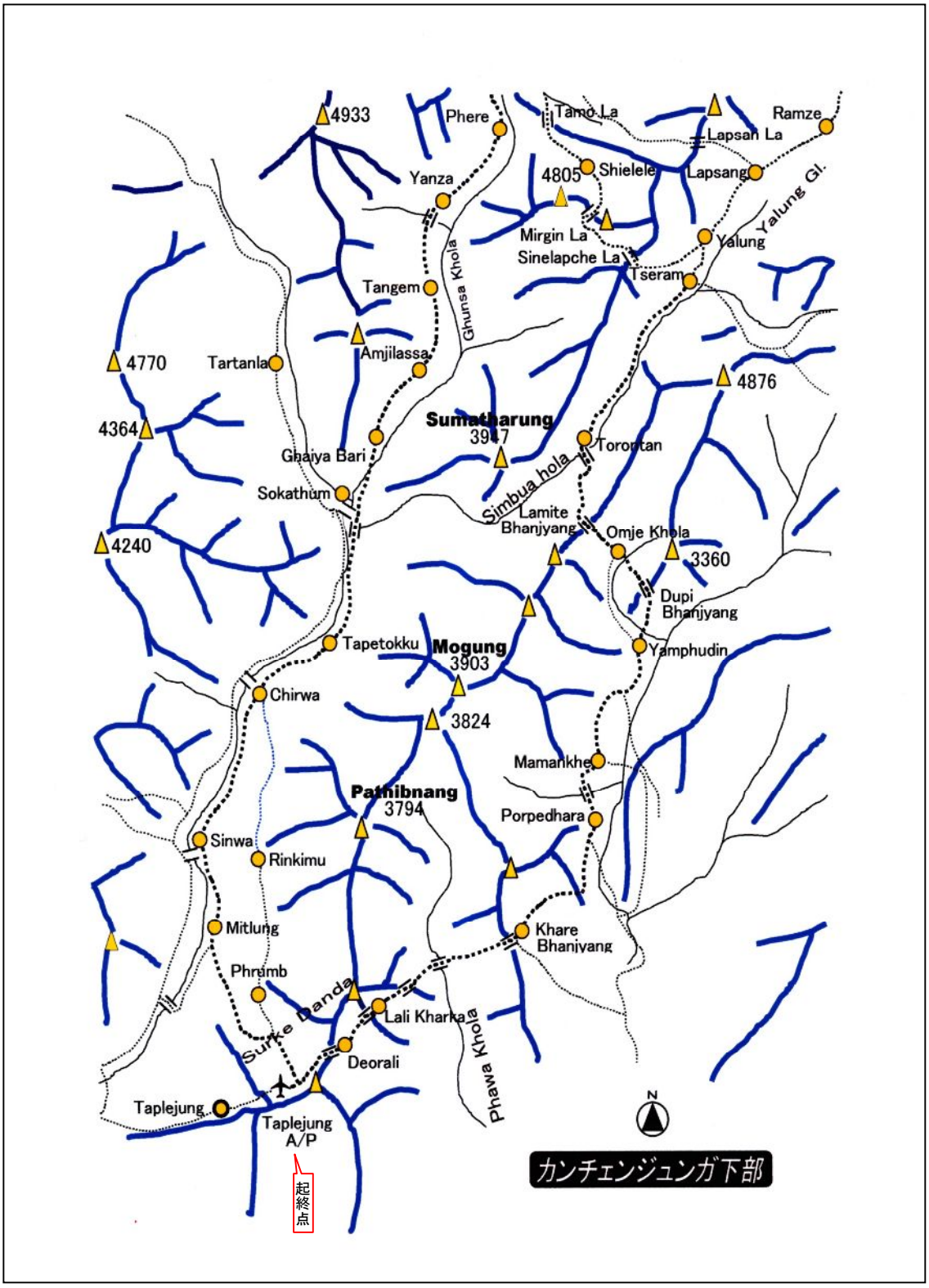
祈りにも似た感謝の心、このふくらみが、あのKangchenjungaの山脈（やまなみ）に重なるというのであろうか。時期（とき）を得た雌花と雄花が、実を結ぼうとするとき、その助けとなるこのさわやかな風があのKangchenjunga氷河の滴を生んだ、大地のぬくもりと、太陽の光に重なるというのであろうか。

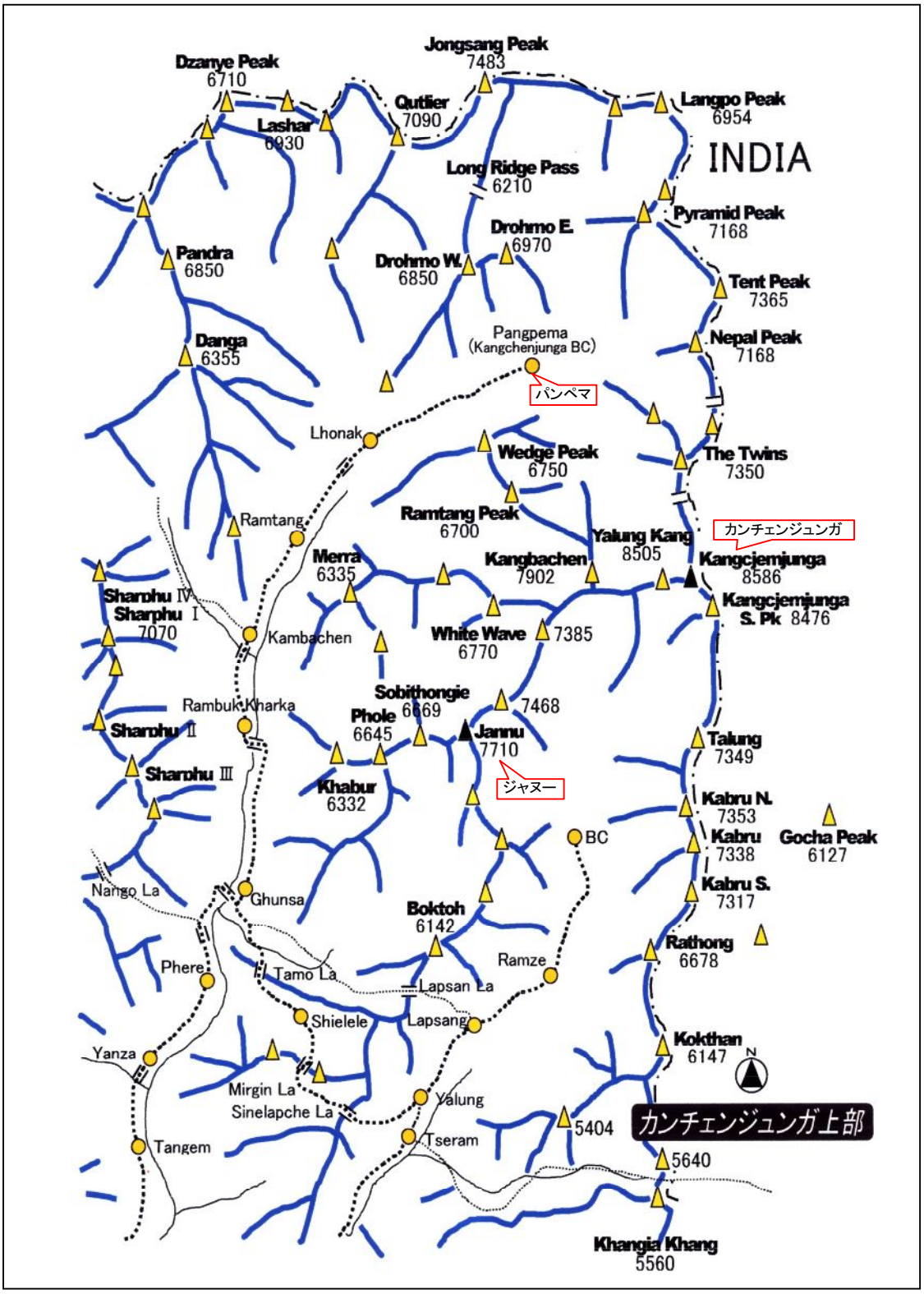
ありがとう。ありがとう。本当にありがとう。
黒い自慢の髪が、わずか三日で真っ白になってしまうほど、悩みぬいて疲れ果てて、最後は、耐え忍ぶという身の処し方で、あのとき、私を支えてくれた Ｏ さんへありがとうをいいながら、この紀行文を閉じることにする。

２００５年３月１２日（土）記

ヤルン氷河からミルギン・ラとパンペマ34日間トレッキング日程計画と行動一覧

日 次		行 程 計 画 （昼食時間・大休憩時間含まず）		行 動 記 録 （昼食時間を含む総行動時間）	
1	10/17 日	成田 バンコク	（バンコク泊/ホテル）	成田 バンコク	計画通り
2	10/18 月	バンコク カトマンドゥ	（カトマンドゥ泊/ホテル）	バンコク カトマンドゥ	計画通り
3	10/19 火	カトマンドゥ滞在	終日滞在、入山手続きと休養 （カトマンドゥ泊/ホテル）	カトマンドゥ滞在	計画通り
4	10/20 水	カトマンドゥ タプレジュン ラリー・カルカ	直行便でタプレジュンへ 着後トレッキング開始 （3.30H）（テント）	カトマンドゥ タプレジュン ラリー・カルカ	（3.15H）
5	10/21 木	ラリー・カルカ カーレバンジャン	（6.00H） （テント）	ラリー・カルカ カーレバンジャン	（8.00H）
6	10/22 金	カーレバンジャン ママンケ	（7.30H） （テント）	カーレバンジャン ママンケ	（9.25H）
7	10/23 土	ママンケ ヤンプーディン	（4.00H） （テント）	ママンケ ヤンプーディン	（5.05H）
8	10/24 日	ヤンプーディン オムジェ・コーラ	（4.00H） （テント）	ヤンプーディン オムジェ・コーラ	（5.20H）
9	10/25 月	オムジェ・コーラ トロンタン	（7.30H） （テント）	オムジェ・コーラ トロンタン	（9.30H）
10	10/26 火	トロンタン ツェラム	（7.00H） （テント）	トロンタン ツェラム	（6.55H）
11	10/27 水	ツェラム滞在	（休養日） （テント）	ツェラム滞在	計画通り
12	10/28 木	ツェラム ラムゼ	（5.00H） （テント）	ツェラム ラムゼ	（5.05H）
13	10/29 金	ラムゼ ヤルン氷河往復 ラムゼ	（2.00H＋α） （テント）	ラムゼ ヤルン氷河往復 ラムゼ	（3.00H）
14	10/30 土	ラムゼ ツェラム	（4.00H＋α） （テント）	ラムゼ ジョルポカリ	（6.30H）
15	10/31 日	ツェラム滞在	予備日 （テント）	ジョルポカリ ミルギン・ラ・サウス	（4.30H）
16	11/01 月	ツェラム ミルギン・ラ手前C.	（7.30H） （テント）	ミルギン・ラ・サウス グンサ	（11.55H）
17	11/02 火	ミルギン・ラ手前C.	（予備日） （テント）	（休養日）	（休養日）
18	11/03 水	ミルギン・ラ手前C グンサ	（6.30H） （テント）	グンサ カンバチェン	（7.10H）
19	11/04 木	グンサ滞在	（予備日） （テント）	カンバチェン ロナーク	（7.20H）
20	11/05 金	グンサ カンバチェン	（5.00H） （テント）	ロナーク パンペマBC	（5.00H）
21	11/06 土	カンバチェン ロナーク	（4.30H） （テント）	パンペマ カンチェンジュンガGL パンペマ	（3.10H）
22	11/07 日	ロナーク パンペマ	（3.00H） （テント）	パンペマ カンバチェン	（8.10H）
23	11/08 月	パンペマ滞在	（テント）	カンバチェン フェレ	（8.15H）
24	11/09 火	パンペマ カンバチェン	（6.00H） （テント）	フェレ アムジラッサ	（9.10H）
25	11/10 水	カンバチェン フェレ	（5.00H） （テント）	アムジラッサ セカトム	（7.05H）
26	11/11 木	フェレ アムジラッサ	（8.00H） （テント）	セカトム チルワ	（6.40H）
27	11/12 金	アムジラッサ セカトム	（5.00H） （テント）	チルワ ミトルン	（6.50H）
28	11/13 土	セカトム チルワ	（5. 00H） （テント）	ミトルン タプレジュン空港	（8.10H）
29	11/14 日	チルワ ミトルン	（6.00H） （テント）	タプレジュン空港滞在	（待機）
30	11/15 月	ミトルン タプレジュン	（6.00H） （ロッジ）	タプレジュン空港滞在	（待機）
31	11/16 火	タプレジュン滞在	（予備日） （ロッジ）	タプレジュン空港 タプレジュン	（1.30H）
32	11/17 水	タプレジュン カトマンドゥ	カトマンドゥへ （カトマンドゥ泊／ホテル）	タプレジュン ビルタモーデ	陸路移動
33	11/18 木	カトマンドゥ バンコク	バンコクに向け出発、乗継 深夜帰国の途へ（機内泊）	ビルタモーデ タプレジュン カトマンドゥ	タプレジュンまで陸路移動 タプレジュンから国内航空
34	11/19 金	成田空港	朝、帰国	カトマンドゥ バンコク	バンコクに向け出発、乗継 深夜帰国の途へ（機内泊）
35	11/20 土			成田空港	一日遅れにて帰国


4933
Phere
Tamo La
Ramze
Lapsan La
Yanza
4805
Shielele
Lapsang
Yalung Gl.
Mirgin La
Sinelapche La
Yalung
Tseram
Tangem
Ghunsa Khola
4770
Tartanla
Amjilassa
4876
4364
Sumatharung
3947
Ghaiya Bari
Toronran
Sokathum
Simbua hola
Lamite Bhanjyang
Omje Khola
4240
3360
Dupi Bhanjyang
Tapetokku
Mogung
3903
Yamphudin
Chirwa
3824
Mamankhe
Pathibnang
3794
Porpedhara
Sinwa
Rinkimu
Mitlung
Khare Bhanjyang
Phrumb
Sukte Danda
Lali Kharka
Deorali
Phawa Khola
Taplejung
Taplejung A/P
起終点
N
カンチェンジュンガ下部


Jongsang Peak
7483
Dzanye Peak
6710
Lashar
6930
Qutlier
7090
Langpo Peak
6954
INDIA
Long Ridge Pass
6210
Pyramid Peak
7168
Drohmo E.
6970
Pandra
6850
Drohmo W.
6850
Tent Peak
7365
Pangpema
(Kangchenjunga BC)
Nepal Peak
7168
Danga
6355
パンペマ
Lhonak
Wedge Peak
6750
The Twins
7350
Ramtang
Ramtang Peak
6700
Yalung Kang
8505
カンチェンジュンガ
Merra
6335
Kangbachen
7902
Kangcjemjunga
8586
Sharphu Ⅳ
Sharphu Ⅰ
7070
Kambachen
White Wave
6770
7385
Kangcjemjunga
S. Pk 8476
Sobithongie
6669
7468
Rambuk Kharka
Phole
6645
Jannu
7710
Sharphu Ⅱ
Talung
7349
Sharphu Ⅲ
Khabur
6332
ジャヌー
Kabru N.
7353
BC
Kabru
7338
Gocha Peak
6127
Nango La
Ghunsa
Kabru S.
7317
Boktoh
6142
Rathong
6678
Phere
Tamo La
Ramze
Lapsan La
Shielele
Lapsang
Kokthan
6147
N
Yanza
Mirgin La
Sinelapche La
Yalung
5404
カンチェンジュンガ上部
Tangem
Tseram
5640
Khangia Khang
5560